
Short Short

小林 太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Short Short

【Nコード】

N7454Q

【作者名】

小林 太陽

【あらすじ】

習作です。掌編、SS形式にあります。

静子

静子は言った。

「あなたは私のことどう思っているの？いつまでそうやって黙ったまま私を置き去りにするの。本当は私のことなんか興味ないんですよ？」

青いパンプスが似合う静子は今日だけは赤く煮えたぎっていた。哲也には彼女の瞳の奥に居る彼女自身が、何かそれは何か泥沼に沈んでゆく蛇の様に見えた。

「……。」

哲也は静子に返す言葉が無かった。哲也は彼女を“愛していた”から、彼女に返す言葉は無かった。

静子はだからこそ泣いた。彼女は肩を揺らし彼の前で泣き崩れて、彼のストラックスを両手で鷲掴みにして何度も何度も引つ張って喚いた。それなのに哲也はただ突っ立ったまま、上から彼女が泣いている様子だけをまるで東京タワーから観覧する様に眺め見下ろしただけだった。

彼は彼女の美しい黒髪の頭頂にそっと手を置き優しく撫でた後、彼女の手を急に振り払うようにして、夜の銀座の街へと再び消えて行った。

静子はホテルの前の路上に崩れた肉塊の様になって、ただ茫然とアルコールが切れた物の怪になって座り込んだ。

青いパンプスが、彼女の脇に片方だけ転がっている。夜の銀座を歩く男女は、誰一人として彼女に声をかけなかった。

哲也は言い知れぬ情緒の虚無に溺れながら、東京駅八重洲口から高速バスに乗って京都へ帰っていった。

島崎

アパートの入口に既に飲み終えた牛乳瓶が数本転がっていた。古田乳業という地元の飲料店が毎朝配達してくれる牛乳である。

哲也はそのアパートの住人で、武山という同級生と一緒にルームシェアをしている学生だった。

「てっちゃん、高校数学の分数関数覚えてる？あれさ、今度研究室の解析で必要なんだよ。教えてくれないか？」

「ああ数？の最初のやつやろ、あんなもん教えるほどでもないわ。ほら、参考書貸したる。」

哲也は自分の机の脇にある本棚から「チャート式数学？」を取り出し、武山に手渡す。武山はそれを受け取り、炬燵に入ってみかんと食べながらそれを開いて読み始めた。

16インチの液晶テレビが武山の木製の机の脇に置いてあって、丁度夕方のニュースが始まりだした頃である。一本の電話が哲也の携帯に入り、哲也はその電話に出た。

「おい、どこにいんだよ！はやくでてこいよ！あ？」

島崎からの電話だった。

「……島崎か。」

「そうだよ、どうすんだよ。美香が泣いてんじゃねえかよ。な？な？おまえやったんだろ？な？それで捨てた？てめー、ただじゃすまねえからな。さっさと大学までこいよ。」

「……いま家に居るんや。今日は行かないから、明日また学校で会おう。」

『(ぶつつ)』

島崎からの電話はおよそ30秒で切れた。哲也はそれに動揺しつつも、横で武山がチャートの関数を目で一生懸命追って理解している様子に安堵を覚え落ち着いた。

だが、今から島崎がこのアパートに乗りこんで来るのではないかと

いう様子だったので哲也はその後味の悪さに、後の夕食の味もまぶしく感じられた。

次の日、大学に顔を出した。武山は二限目からだったので、一緒にアパートを出ることは無かった。教室に着くと島崎が居た。彼は何故か今日も淫靡な光沢ある雰囲気を漂わせていて、肩の周りからは黒い霧の様なものが立ちこめている様に見える。

美香がその島崎と一緒に教室で座っていた。二人の周りの空気だけ、何故かブラックホールの様に全ての光を吸収してしまう様子を携え、他のクラスメイトは近寄り難そうにしていた。

美香とは実験班が同じで、先日は図書館でヘモグロビンにおける錯体の構造について調べるために二人と一緒に居たのだった。そして学校を出てから、途中まで一緒に帰っただけだった。

美香を窓際で誘っている島崎は哲也の方を振り向いてこう言った。

「てめーがわるいんだよ！」

哲也は動揺しなかった。

「ごめん、小便しにトイレ行ってくる。」

哲也はトイレに行くと、トイレにある化粧鏡を一発本気で殴った。

拳からはどす黒い血が流れ、化粧鏡は蜘蛛の巣の様に血みどろに染まって割れた。

有子

佐山有子は東京都文京区にあるヤマハの音楽教室でピアノの講師をしていた。音楽大学を卒業してから、ヤマハ音楽教室のスタッフになったのだが、新しく入ってきた新人の講師達に仕事を取られて、今は臨時講師として働いていた。

元々、大学でピアノ科を専攻していたのだけでも、親の理想を押し付けられてなったピアノリストよりも、アパレルデザイナーになることの方が夢だったので、単位はギリギリで取得し大学を卒業したのであった。手に職があるということで、ヤマハのピアノ教室に勤務することになったのだが、どうも自分には向いていないのではないのだろうかと近頃はハッキリと気付いてきた所だった。

賢治はそんな彼女のことをいつも応援していた。自分がピアノリストに憧れていた夢を彼女が果たしてくれろと期待したからである。だから賢治はそんな彼女に憧れと自分の夢を混同していた様だった。

「賢治君。私、ピアノ向いてないと思うのよ。」

「どうして？あんなに昔から頑張ってきたじゃないか。」

「賢治君は知らないのよ、私の高校時代しか。私は結局、親のエゴによってピアノリストにさせられて本当の自分を見失ってきたまま生きてきたのよ。本当の私って何だろう。」

「…。僕には有子ちゃんがとても輝いて立派に見えるよ。僕はピアノリストの有子ちゃんには今でも憧れているよ。」

「…。」

有子は彼にあなたは私のことなんか何も分かっていないという様な顔をしていた。

グラスに注がれたコーヒーが、照明の眩い光によって黒い塊の様な影だけをテーブルクロスの上に滲む様に映し出していた。有子はそこへ涙を溢した。

「私、時々自分が分からなくなるの。何故こんなにも辛い思いをし

なければならぬのかが…。私が何か悪いことでもしたの？私はいい子だったのよ。そう、いい子だったの。親の期待通りにずっと生きてきたわ。なのに私は一向に…」

「一向に鳥籠から飛び立てない鳥みたいなんだね。僕は有子ちゃんがそんなに悩んでいるなんて思わなかったよ。いつもコンサートに行くとき、有子ちゃんは僕には輝いて見えるんだ。僕はきつと鈍感なのかな。」

有子は首を横に振った。しかし有子は心の片隅で賢治がまるでアイドルを追っかけるオタクの様に、自分の気持ちではなく相手の気持ち、つまり私の気持ちに鈍感なのだと思いたかった。

「私は何かを間違っている様な気がするの。私は何を求めてきたのだろう。今では臨時講師よ。新人は皆元気で、私は教室では輝いていないの。いえ、新人も空元気なのかもしれないわね。でも、私はそんな空元気さえもう出せなくなったのよ。」

「…。うーんそうなんだね。新人も空元気がもれないんだね。でもなあ、僕は有子ちゃんのコンサート好きなんだけどなあ。」
有子は賢治と別れた後、文京区白山にある自宅へ戻った。部屋のベッドには毎のクッションが二つ転がっていた。有子には丁度今、彼氏も誰も居ない。だから余計に一人ぼちの様な気がした。毎のクッションを一つ手に取ると、積み積った闇から抜け出す様に思いつきり壁に投げつけた。

ベッドに転がると、先程の賢治の力の抜けた様な甘い表情と言葉を思い出して反芻していた。

自分が幸せになることと他人が幸せになることは一致しないのかもしれない。私はピアニストとして生活をしていても何の楽しみもない。だけど、賢治君は私のピアノに喜んでくれている。いやでも賢治君はお世辞で言ったのかもしれない。他に誰が私のピアノを喜んでくれるの？

有子は賢治以外の人物の言っていたこと、表情を振り返る様に確かめた。

あの人、私のピアノに喜んでくれてたわよね。そうだ、あの人も……あの人も……。高校の時の先生も。でも何故大学のあの先生は私のピアノが駄目だって言い続けたんだろう。私はもともとピアノが好きじゃなかった。あの先生に会ってから初めてそれを自覚したのよ。だから私は大学に行くのも好きじゃなかった。毎日、男と遊んでいたわ。あの頃は本当にどうにかしていた……。達哉君は今どうしているんだろう……。あの頃に戻りたい、あの頃に……。

有子はしばらくして達哉に電話をした。携帯電話で達哉の番号を探した。手はただただ震えていた。そして有子は達哉の声を待っていた。

「おお、有子。久しぶり、どうしたんだよ。」

「達哉……。いまいい？」

「あーいいよ。風呂は入る所だったけどね。」

「……。」

有子は泣いた。掻き毟る様な声で達哉に賢治に話した様に話し続けた。

「そうだったのか……。なあ有子。おまえ、もう少し大人になれよ。現実を見るよ。おまえはピアノが出来るじゃないか。俺なんか未だにドレミファソラシドも弾けないぞ。有子は有名なクラシックの曲も弾けるんだろ？それは凄いことだよ。それに高校時代、おまえは音楽の先生なんか比べ様にならないほど、素敵なメロディを奏でていたじゃないか。おまえのピアノには心が籠っているんだよ。」

「……達哉の嘘つき！私のピアノに心なんか籠っていない。私は何も考えず何も感じずただ無機質に弾いているだけよ。私は無になって私は私ではなくなって、ただ機械の様に弾いているだけよ！」

達哉が電話越しで戸惑っている様に思えた。しかし、達哉は数十秒の沈黙の後にこう言った。

「……。有子。おまえは気付いていないかもしれないが、今おまえが言ったことの中に全ての答えがある。いいか？よく聞けよ。……本物の職人つてのはな“私”があつたら駄目なんだよ。“無私”になつ

て出来るからこそ、いい作品が作れるんだ。おまえが無になつてお前がピアノそのものになるから、おまえのコンサートは素晴らしいんだよ。おまえはだからピアノによって聴衆に夢を与えることが出来るんだ。多分だけどな、夢を与えている人間ってのは、一番現実的な意識に居る人間なんだと思うぞ。」

有子は少しだけ耳を疑った。あの遊び人の達哉がそんな話をするとは思ひもよらなかつたからだ。

彼には大学時代、下宿先に訪れては貪る様に身を預けさせた。有子はもう人じゃなくて物になりたかつたのだ。彼女は物の様に扱われることによって、自分の虚無を昇華させていた。あの瞬間だけ、無の自分が有になつた様な気がしていた。

「達哉君…、今晚はもう寝るね。」

「ああ、俺も風呂入るよ。泣いてんじゃねえぞ、ばーか。」

有子は少しだけ、本当の自分というものを取り戻せた気がした。

奈緒

革製のポストンバックを抱えた健也は、午前十一時過ぎ、東京駅日本橋口で奈緒を待っていた。

奈緒は大学卒業後、名古屋にある出版社に勤務し、東京の文具メーカーに勤める健也と遠距離恋愛をしていた。二人は大学の美術サークルで知り合ってから、間を置くことなく自然に付き合うことになった。

二人の絆を繋いでいたのは何よりもその空気の様な親密さだった。初めて健也が彼女に会った時、彼は不思議な違和感を抱いた。これまで一度も誰にも感じたことの無い印象を目に見えぬ媒体を通して与えられ、その瞬間は彼は自分を呑みこまれるのではないかと怯えたものだが、何故か無条件に彼女の前だけは自分の存在を許せたような気がした。

そして、彼女も彼によって自分の存在を確かめようとして、休日によく彼を家に転がり込ませていた。

健也はサークルで自分の作品には青紫色を好んで使用していたが、彼女は赤紫色を好んでいた。

彼女の作品にはとても感覚的な表現が目立ち、その絵の中に映る人物にはいつも記号の様な意味が表れていることを彼は知っていた。同じサークルの仲間と和気藹藹と時間を過ごしていたとしても、それは決してその仲間とは共有出来ない、二人だけの秘密の暗号だった。

午前十一時半、奈緒は健也の待つ改札にやってきた。

「おおー、待った？」

「いんや、さつき来たばかりだよ。」

彼女は微笑むことに慣れていないのか、少し怯えて悲しそうな顔と微笑む顔を重ねて魅せた。健也にはその彼女の微笑みが、彼女だけの微笑みが、まるで稀少な価値のある何かの宝石の原石そのものの

様に思えた。

「バッグ持とうか？」

「あらあ嬉しい。でも、いい。」

奈緒は決して表では彼に甘えようとはしなかった。それが彼女の気品だった。健也は黙って奈緒の手を握り、バッグから手を放させた。二人は青森行きの特急列車に乗った。特急列車の中で二人は前回会ってから今回会うまでの間に経験したことを話そうとしていた様にした。なのに二人は言葉を交わすことなく、ただ黙って列車の外の景色を見ながら座っていた。

青森に着いた時は、もう日が暮れていた。二人は駅から離れた所にある個人が経営するくたびれた雰囲気の老舗の洋食屋に入った。

「いらっしやいませ。」

コックの姿をした女性が、二人を出迎えた。二人は店の奥にある喫煙席に腰を掛けた。

「煙草切れちゃったみたい。健也君持つてる？」

「ああ、セッターだけどいいか？」

「うん。」

奈緒は手持ちのバッグから彫刻のあるジッポを取り出した。これは一年前に二人が名古屋の繁華街にある雑貨屋で買ったものだった。彼女は彼にどれがいいかを尋ね、彼がじっくりと店内のジッポに目を凝らしてようやく選んだものだった。彼女に最初に選んであげたものは彼女のお気に召さなかった様で、もう一つ、もう二つと彼は選んだのだが、結局最初に選んだものに落ち着いた。健也はいつも彼女と買い物に行く度にどれがいいかを尋ねられた。健也は彼女に似合うものをいつも選ぶことに疲れて、適当に自分を納得させたこともあった。しかし彼女はそれを見抜いていた様だった。

しばらくすると、二人の元に白身魚をメインディッシュとしたディナーが運び込まれた。先程のコックの女性が運んで来られたのだが、この店にはウェイターが居らず、コック二人で店を回している様であった。

健也はその健気な店の主達に感心をしていた。前の席に掛けている奈緒はそれを見て何かを感じている様だった。

「コーヒーはいつお持ちいたしまししょうか？」

コックの女性が落ち着いた物腰で、健也ではなく奈緒にそう尋ねた。奈緒はしつかりとした眼差しで、その女性に食後に持つてくる様に伝えた。

二人は時間を忘れて話し続けた。既に時計は二十一時を過ぎていた。彼女の出版社での職場の話、学生時代の同級生の話、プライベートでの話：健也はそれをただ聞いていて、時々声色を変えて答えていた。

健也がお手洗いのために席を立つと、奈緒は店の外を窓を通して眺めていた。窓の外には橙の街灯が立ち並び、曲線を描く前の春雨の様な、ゴツホの描いた浮世絵に写る時雨の様な、優しい白い雨が降っているのが目に映った。奈緒は煙草を吸いながら幾分か安らぎに満ちた幸せを覚えた。

彼がお手洗いから帰ってくると、コーヒーが二人分用意されていた。「もうこんな時間か。結構長いこと居たんだね。」

「健也君、そろそろ出る？」

奈緒は健也を気遣った。彼は彼女に勘違いさせたと思い、コーヒーを嗜むことを勧めた。

二人の会話の熱が冷めた頃、丁度手元の花柄のカップに注がれたコーヒーも冷めかけていたので、健也は急ぐようにしてそれを飲み干し、二人は店を出てタクシーを拾った。

タクシーで到着し予約していた旅館は思ったよりも小さな旅館だった。入口には楓が紅葉し、根元には丸い地蔵の様な頭をした岩が幾つか非対称的に並べられていた。それは先程の洋食屋を出る時に二人の間に生じた風流に似ていた。

十畳の和室には内風呂も備えられていた。奈緒はそこで健也に恥じらいを覚えて後で入ると言った。

彼は奈緒に何か他愛の無いことを話しながら、近づいて手を取った。

彼女はそこでこう言った。

「ジツポ、さっきのお店に忘れてきちゃったよ。」

健也はそれを聞いて思わず微笑んだ。奈緒もまるで何かをずっと堪えていたかのように美しく微笑んでくれた。

磐田

笹川克典と磐田勇矢は兵庫県加古川市にある炭火焼き肉のお店で飲食を共にしていた。笹川と磐田は幼稚園時代からの友人であった。

中学卒業後、笹川は大阪の男子校に入学し、磐田は地元の共学の高校に進み、二人は今就職を控えている大学生だった。

「勇ちゃん、カルビが食べたいねん。注文してくれへん？」

「…。ほら、メニューあるで。」

笹川はユツケと野菜の盛り合わせを頼んだ。

「なあ、どうなんや最近これは？」

「これって何や？」

笹川は磐田が小指を立てているのを見て気付いた。

「彼女や、彼女。」

「あー。」

「克典は昔っから優しいからなあ。女の子に優しくばかりしとったらあかんで。」

笹川は目の前の炭火でホルモンの中に火がよく通る様に焼いていた。「彼女か居らんや。男子校やったからの。でもな、俺は大人のピノコみたいな女性が好きなんや。」

磐田が喉まで泡ぶくの様なものを堪えた様子で高笑いした。

二人は一时间ほどこの店に滞在した後、駅前にあるソウルミュージックの流れるバーに入るようになった。

マスターが磐田に挨拶して出迎えた。磐田はこの店によく出入りする常連の様だった。

赤い弾力のあるレザーチェアに二人は腰を掛けた後、磐田はお気に入りのジャパニーズウィスキーを、笹川はお酒に詳しくなかったのでマスターのお勧めするお酒を申し出た。

お酒が周ってきてしばらくした後、磐田が笹川にこんなことを言い始めた。

「綺麗なだけの人間に魅力を感じんねん。克典はさ、もつと社会の裏つてものを知った方がいいと思うんや。」

笹川は目を俯かせてから、また磐田を見た。

「…そうやな。それも大事やな。どうしたらええんかな。」

「優しさだけじゃ生きていけない。分かるか？」

笹川はシェイカーを振っている店員にチエイサーを持ってくる様に頼んだ。隣で磐田がマイセンを吹かし、灰皿には二人の思い出が積っていた。

しばらくして二人はバーを出て駅で別れた。笹川は垂水の下宿先に戻る電車の中で、磐田の言葉を反芻しながら、自分の不甲斐無さに一条の光を求めていた。

それからしばらく日の経過を見てからのことだった。磐田は国道一号线を走っていた所、飲酒運転にて自損事故を起こし重傷を負ったとの連絡が共通の友人を通して笹川の耳に入った。笹川はすぐに職場の出先から、メールでお見舞いの言葉を送ることにした。連絡がつくと磐田は自分の右手を失った様子の写真を添付したメールをすぐに返信してきた。

笹川にはもう返す言葉が見当たらなかった。

水谷

水谷寿士は地元で名声のある県議会議員の一人である。水谷はある地方都市で水資源の有効活用を目的とした砂状ダム建設を推進し、他事業を邁進する議員達と名を競い合う勇士の一人だった。

水谷はその絶大な権力によってダム事業を着実に成功させ、受注していた土建会社に多くの潤いを与えていたが、彼の指揮する事業には地元の土建会社との深い癒着があり、一部の関係者には種々の噂が立っていた。

八月のある日、水谷は本事務所の部下と共にライオンズクラブの懇親会に参加した。そこには旧知の仲であった佐々木が籍を置いており、その晩、二年振りにお酒の席で再会することになった。

「おお、佐々木じゃないか。今どうしてるんだ？」

「こんばんは水谷さん。最近は隠退気味ですが、細々と児童保育振興のチャリティーを継続しておりますよ。」

「そうか、元気そうで何よりだな！」

水谷は紺色のスーツを着て、青いカフスを留めていた佐々木に憧憬と共に懐疑的な想いを強く抱いていると、佐々木はいつもの癖を露わにしこう言った。

「……ははは、どうも。しかし中々腰が重い様で児童の元には参らないのですけども。」

水谷は昔から佐々木その輪郭の乏しき佇まいを腹の底で侮蔑しながら恨めしい想いも抱いていた。

水谷には昔から多くの夢があった。自らの望む夢は全て成功させてきた熱い魂の持ち主なのである。自分の和魂を河の流れの様にゆき地域社会に見出し、経済的停滞などはものともせず、地域の根幹から幾つもの華を紡いできたつもりだった。部下と共に河岸に咲き乱れ迷う黄の華々を摘み取りながら、自らの栄華を肥やしてきたのだった。

「水谷さん、熱燗二合にしますか？それとも一合にします？」

部下の重田が色とりどりの和の食材が並べられた長い木卓の下で、彼と“魂”の握手をした。水谷の心は確かな面持ちを取り戻し、手元の吸い物を二口、三口とすすった。

「私の文化振興の方はさっぱり進みませんでなあ。水谷さんはいやはや流石。…それにしても遠山建設は今年も安泰ですな。ははは。」

「あああら、お酒がちよいと進んでるみたいね。ほほほ…」
水谷の斜め前に掛けている大槻が酔い微笑んでその様に言い、添い人が目配せをしながら大槻の握る益子焼の御猪口に並々と注ぎ足していた。

すると水谷は自分の嗜んでいた香ばしく立派に焼きあがった大ぶりのししやもを大槻にお裾分けすることにし、手元の小皿のまま渡した。大槻は酔いに似せた紅潮の顔をして、そのししやもを一回、二回と八重歯で噛みちぎる様にして頬張った。他の者共が談笑する橙の空気の中で、大槻の添い人が手元に置いていたポシェットから光沢のある絹のハンカチを取り出し、大槻の口元を隠れる様に二、三度拭っていた。すると、それを見ていた佐々木が大槻から水谷の部下の重田に目を移した。

「…重田さん、私にもししやも頂けませんかね？お袋が私が郷へ帰ったときにはいつも焼いてくれるんですよ。港町ですから私は帰郷する度にそれを楽しみにしているんです。」

佐々木が重田に血の気の無い顔で幽寂として言った後、彼は屈辱を奪われた様な気がした。

「…いや。」

重田はそして水谷の顔を見た。水谷の墨色をした顔がみるみる灰色に、そして青色に、佐々木と同じ血の気の無い色に変わってゆく様子が見て取れた。佐々木は大槻の添い人の目前にあった、ししやもの皿を引き寄せ、その佇まいで食べたのであった。重田はただ茫然とそれを眺め、水谷は脇で俯いた。

水谷はその会のあった深夜、部下と別れてからタクシーを拾い愛人

を囲う市外の邸宅に寄った。

「おい、静子。なんだこの散らかし様は。」

「…あら、おかえりなさい。どうしたの？」

「どうしたのじゃないだろう。いい加減、買った服は箆笥に片付けろ！」

すると、水谷は愛人の静子を居間で押し倒した後、顔に痣が出来るほど平手打ちを重ねた。静子はそれを拒否することも無く、泣くことも無く、ただ黙って彼を受け取り、終いには肩を揺らす様に笑い出した。

水谷は酔いにぼやけた静子の美醜を見つめながら思いつめた。

「おまえはいつも俺の夢を踏みにじるのだ。俺の手で築き上げてきた城を、おまえは崩す様に、いや、おまえは俺の“夢の対象”を奪いに掛かるんだ。だからおまえを許さない。許せないぞ。おまえが憎い、おまえが憎い…」

水谷は佐々木を想いながら、目の前の静子の首を絞めた。そしてその後、静子に服を脱ぐように命令し、彼女はその濃い化粧の顔のまま服を一つ、二つと脱ぎ捨てる。彼はその肉厚な両手で彼女を再び地に、いや、血に墮とし押さえつけた。

時計は二時半を指そうとしていた。そして冷たい汗で濡れた布団の中で静子は不敵な笑みを見せながら、こう言った。

「ねえ水谷さん聞いて。私の夢の対象はね、水谷さんなの。それはね“欲望の対象”なの。」

水谷はこの時初めて目の前の静子に言い知れぬ人外の慄きを覚えて、土曜日の明け方、寝室にある座卓に二階の金庫の鍵と彼女宛てに別れの言葉を書いた付箋を置いて、タクシーを拾い事務所に戻ろうと思ったが、ふと砂状ダムが頭に浮かんだ。

「おはようございます。どちらまで行かれますかね？」

「遠山のダムまで向かってくれないか？」

「あそこですか？一時間半ほど掛かりますけど、お客さん宜しいですかね？」

「…。ああ、お願いするよ。」

「分かりました。」

タクシーの運転手は水谷よりも十ほど低い年齢に思えた。座席にはモノクロの写真と共に大竹という名前が表示されていた。大竹は鼻歌を歌いながら、国道を抜け、県道を軽やかに運転してゆく。その姿を後ろから見ている水谷は、何故かその大竹に幾分かの関心を抱いた。そして、彼らしからぬことを突然尋ねた。

「大竹さんには夢はあるか？」

大竹は鼻歌を歌っていたが、口を噤んだままだった。水谷の言葉が聞こえていなかったのだろう。水谷は間を置いてから大竹に再び同じことを尋ねようと思ったが躊躇った。すると大竹がこう言った。

「…お客さん、何しにダムに行くんです？」

水谷はその言葉に激しい焦燥感を覚えて、鋒鏑とした魂の混沌が腹の底から溢れだしそうになったが、堪えたまま決して言うことはなかった。

「…私、あのダムの脇にある公園が好きなんですよ。嫁の親戚の甥っ子と何度か遊びに行ったことがありますね。」

水谷の困惑は的外れた。大倉はラジオのチューニングを変えて、プロ野球の放送を流している。試合は丁度、九回裏だった。

小一時間ほどして、遠山建設の関わった砂状ダムの中腹に到着した。水谷は万札を二枚財布から抜き取り、お釣りはいらないと述べてバツクシートに置いて、彼と別れた。すると彼が車から降りて来て、小走りに水谷を追いかけた。

「お客さん、待って下さい。お釣り！お釣り！返しますよ！！」

「…いいんだ。受け取ってくれ。」

「お客さん…。」

よく見ると、その大竹は誰かに似ていた。バツクシートから見えたフロントミラーには大竹の目元しか見えなくてよく分からなかったが、背後から見えた大竹のその“輪郭の無い佇まい”は誰かに似ていた。

「…大竹さん、いい仕事してんなあ。でも、釣りはいらさないから。」「
年季の入った紺色のスーツを着た大竹がこう言った。

「お客さん。代金は余分には頂戴致しません。私の夢は、あなたをお望みの場所まで安全に導いてあげることだけなんです。どうぞお返ししますから。恐れ入りますがお受け取りください。」「

水谷は不意に何かに気付いた。それは、目の前の運転手が佐々木に見えてくるということだった。

すると、彼はお釣りの小銭を確かに受け取った後、何故か突然大竹の前で震える様に泣き叫び出した。幾千の戦を潜り抜けてきたその肉厚な手に受け取ったたった数百円小銭が、何かそれは何かとても有り難いものの様に思え、激しく慟哭したのだった。

「…。…あ、り、が、と、う。…あ、り、がと。…ありがと。」「

水谷の中から幾多の“魂”が、天に昇ってゆく様に大竹には見えた。大竹は水谷に礼を述べて優しく微笑んだ。

上木

「み、み、未佐子ちゃん！」

上木史郎が車から降りてきた柴田未佐子に笑顔を振りまきながら呼んだ。隣の近松がそれを聞きながら笑っていた。上木と未佐子は幼馴染で、昔はよく遊んでいたのだが、未佐子は年々上木の馴れ馴れしさに疎ましさを覚えて、最近は益々疎遠になっていた。

「上木君。恥ずかしいからやめてくれる？」

「…。未佐子ちゃん！」

未佐子はまるであなたに言われたくないわよとでも言いたげな嫌そうな顔をしていた。近松は隣で今度は苦笑いし始めた。三人はこれから仕事の打ち合わせで、市役所にある観光課の研修室に向かうところだった。

近松が今回持ってきた事案は『市の文化振興における財源の確保2』というものだった。近松はきのこの梱包と流通を受け持つ地元の大きな会社の息子だった。上木は今はタクシーの運転手をしているが、市民活動団体である『発明クラブ』というサークルに入っていた。近松と上木はサークルの懇親会で知り合い今回の事案についての検討を始めることになった。

上木は未佐子の顔を見ながらにたと嬉しそうだった。

「未佐子ちゃん、今日は忙しい所来てくれてありがとう！」

「本当、忙しいったらありゃしないわ。で、具体的に何の用なのよ？」

未佐子に上木を邪見に扱っていると、近松が未佐子の顔を覗き込み、冷静に言葉を選びこう言った。

「実は、上木君が市の文化振興のために何かやりたいと言っているんです。それでアイデアは一杯あるんですけど、上木君のことだから全然現実味がないことばかり言ってる埒が明かないんですよ。だからここはぜひ未佐子さんに何か具体的なアドバイスを戴きたい

と思いましてね。」

「そういうことなんですね。…あ、遅れました。はじめまして、私わたくし、柴田未佐子と申します。観光課で観光事業に関する総務の仕事をしております。今の時期は、海開きをして間もないですから、地方や都市から来られる海水浴客の対応に追われている所ですね。あ、失礼ですが、あなたのお名前は？」

近松がスーツから銀色の名刺入れから自分の経歴を書いた名刺を取り出した。

「こちらこそ申し遅れました。近松門左衛門と申します。…いや、嘘です。近松健太郎と申します。近松農業は御存じですかね？」

未佐子が一瞬嫌そうな顔を見せた。

「…ええ、存じております。67号線沿いにあるきのこの会社でしたよね？」

「そうですね、そうです。それで私は近松農業の経営者なんです。それで会社運営の傍ら、市の文化委員会に所属している者なんですよ。上木君とはサークルの懇親会で知り合いました、それで…」

「あつ、ここではなんですから、研修室に移動いたしましょうか？」

「…あ、そうですね。移動しましょうか。」

脇で上木はまつ毛の長い円らな瞳を何度も瞬きさせて、二人のやりとりを眺めていた。上木は近松と未佐子が話している脇で一人寂しそうに、まるで4、5歳の子供が口に指を咥えるかのようにしてそれを眺めていた。三人は通路の奥にある研修室へ移動した。未佐子は上木とは一切目を合わせなかったが、上木は未佐子のことばかり気にかけていた。

「では、例の事案なんですが、御目通し戴けますかね？」

「どうもありがとうございます。」

未佐子は赤いマニキュアを塗った形の整った手で受け取り読み始めた。3分ほどそれをよく読むと、まるで三角フラスコの中の液体が沸騰するかの如く顔を真っ赤にして怒りだした。

「…上木君！こんな出来るわけないでしょ！」

近松が隣の上木を見ると彼は泣きそうな顔になっていた。

「未佐子ちゃん…ぼくは、どうしても、これをやりたいんだよ…。」
上木が母親に玩具をねだるかのような撫で声でそう呟いていた。

「ですよね…。上木君…、馬鹿だからな。」

「ひどいよ！近松君まで！！ぼくは真面目に言っているんだ！！
ぼくは、ぼくは、ぼくの事案が通るまでこの席を離れないぞつ！！」
今度は上木が顔を真っ赤にして駄々を捏ね始めた。足をバタバタさせて、手は研修室の長机をバンバンと叩きだした。

「…上木！うるさい！！」

未佐子もかんかんに沸騰して怒った。すると丁度市役所のチャイムが鳴った。

「あ、3時ですね。未佐子さんお時間大丈夫ですか？」

外は燦々と陽が輝き、窓際にある壁時計は丁度90度の屈折を示していた。三角フラスコの中の液中に、沸騰石を落とされた二人は大人しくなった。

「まだ、時間は大丈夫です。…それにしても、こんなに街中にオブジェを立ててどうするんですか？100メートル置きに国道の脇にオブジェを立てる？それも何なの、この変なオブジェは。」

「未佐子ちゃんは知っているはずだよ。僕が小学校の時にノートにいつも描いていたいろんな生き物だよ。」

「あんだ、まだこんなことやってたのっ！？」

再びフラスコの中の液が突沸し始めた。

「うん…。あれから毎日毎日、ノートに描いていたんだよ。」

「上木君は、いつもタクシーの運転をしながら、この生き物を考えて暇さえあればメモ帳に描き込んでいたらしいんですよ。」

「…上木！ちゃんと仕事しろ！！」

フラスコの中から液が弾けて飛んだ。上木の生きがいは、毎日この変な生き物をノートに描き続けることだったらしい。その生き物たちは足が何本もあったり、昆虫みたいなものから宇宙人みたいなものまで沢山いるのだが、みんなそれはそれは幸せそうな顔をしてい

るのだった。上木はこの生き物を描き続けて、もう20年が経っていた。

「未佐子さん、どうですかね。私の会社からも幾らか出資できますが、本人のデザイン料は無しとして見積もっても、街中に立てるとなるとこれは数十億円必要になりますよ。」

未佐子は急に冷めた顔をしてこう言った。

「…上木君。こういうのは一人でやってね。」

そして上木は、近松と未佐子の前で号泣して土下座した。二人にはその土下座の意味が分からなかった。フラスコを温めていたアルコールランプは鎮火した。上木は浮かばれなかった。

理枝

南青山を抜けてから夕方、渋谷に着いた。理枝は母の店に行かなければならない用事があったからである。

理枝の母親はそこにある貸しテナントで、国内のデザイナーの作品を販売するブティックの経営者であった。

その理枝の母は祥子というのだけでも、若い頃はそれはそれは大変美人で数々の男たちを手玉に取り、猛烈なアプローチをされるような人だったのだが、実は恋愛には奥手でとても強い倫理観を持つ女性だった。

しかしその倫理観はある種の強迫観念の様相を帯びていて、包み込むような恋愛というよりも切り刻む様な恋愛をしてしまうという不都合さを常に抱えていた。

彼女はそのルックス柄、男性からは高嶺の花の様に思われていたのだが、付き合いを深めるほどにその毒々しいほどの美貌の裏にある情緒の不安定さがいつも露わになり、最後には捨てられてしまうような女だった。

理枝はそんな母と、ある男性との間に生まれた一人娘だったのだけでも、生憎母親のような“無敵”なルックスには恵まれず、父親譲りの平均的な顔の作りだったが、男と別れる度に嘆いて狂乱する母みたいになることは一度も無かった。

理枝は母の店に着くと、裏の出入り口から三畳間ほどの事務所の部屋に入って鞆を置いた。ハルタの安いローファーを脱いでから、窓際にある緑色の古い冷蔵庫の中からお茶の入ったペットボトルを取り出してそのまま口をつけて飲んでみると、母の祥子がやってきた。「…理枝！お行儀が悪いわね！！女の子なんだから、ちゃんとコップに入れなさいっ！」

理枝は母の登場に驚くことは無かった。これが母とのやり取りの日常だからだ。

「…普通、お帰りでしょ？…お客さんに聞こえるよ。」

理枝はペットボトルを段ボールの上に置くと、頼まれていた役所の書類を鞆から出して渡した。

「ほら、これで夕飯でも食べてきなさい。」

祥子は理枝に千円札を一枚渡した。理枝は慣れた顔をしてそれを受け取りまた事務所の外へ出た。

理枝は今一人暮らしをしている。理枝は高校三年生なのだけでも、母と一緒に暮らさず、母の仕送りと自分のアルバイトで貯めたお金で一人暮らしをしている。

いや本当のことをいうならば、笹田というアルバイト先の男性と同棲しているのであった。

先日は母、祥子の仕事後に久しぶりに母の住む古いマンションに寄る機会があったのでお邪魔したのだけでも、玄関を開けるや否や大量の段ボールが無造作に積まれていた。店に置ききれない在庫を一時自宅に保管するためだった。

玄関に入って直ぐ右側の部屋が寝室兼仏間であった。母は熱心な法華経信者なのである。法華経の中の女人往生を深く信じているようだった。

変なことを言うのもなんだが、母はその日の夜、理枝にこんなことを言っていた。

「毎晩、大きな大きな男がやってくるのよ。大きな大きな…大男よ。玄関の前まで来て、そして階段を下りてゆく。しばらくするとまた戻ってきて…。」

理枝は母に尋ねた。

「どんな人なの？マンションの人？？」

しかし、祥子はそこで口を噤んだまま答えることはなかった。

そういえばある日、理枝と祥子は公園を散歩したことがあった。

「黙ってたけど、さつきあの木影に男の人が居たわよね？」

「えっ？いないよ。いないいない。」

「居たわよ。私たちが話していたことずっと聞いていたのよ。」

理枝はこの時、母のことが初めて心配になった。

母はいつも情緒不安定だった。家の中で包丁を持って暴れたこともあった。でも決して理枝の前で泣き崩れる様なことは無かった。

先程母からもらって握りしめていた千円札はクシャクシャになっていて、野口英世の顔が泣いていた。そして理枝は笹田に電話した。

「あつ、たつちゃん？いまからご飯食べ行かない？」

「なんだよ、これから仕事だよ。」

「家居るの？私、今から帰るところだけど。」

「あー。あつそうそう、部屋掃除しとけよ。散らかったぞ。」

「…。」

数秒の沈黙の後、理枝は電話越しに笹田に愚痴を述べた。

「…はー？あんた掃除しときなさいよ。」

…ブツッ。

すると、笹田は携帯を切ったようだった。その後、理枝は夜の渋谷に消えていった。

その日、彼女が家に帰ったのは午前3時だった。制服のポケットには母からもらった千円札の他に三つに折りたたまれた万札が数枚入っていた。

ローファを脱いででから便所で吐いた後、お風呂で身体を洗った後に泥のようになってベッドの中で眠った。それは高校卒業を二カ月後に控えていた冬のことだった。

和樹

三宮のセンター街を抜けてから、宝来和樹は同学部の高野との待ち合わせで、ある美術館にバスで向かっていた。国道2号線の界限には、酒蔵や食品工場などが立ち並んでいて、その隣にその美術館はある。

和樹は高野との待ち合わせに遅れないよう、そのバスに揺られながら、車外の海辺の風景と腕時計に視点を往復させていた。つい先日まで付き合っていた由愛からのメールはまだ開けられることなく、携帯のフォルダの中に眠ったままだった。

美術館前のバス停で降りると、街路樹が立ち並ぶ石畳の光景に、いぶし銀を連想させるような硬質な気持ち覚えながら、煌々と照りつける真夏の太陽に再び汗を湿らせ降り立った。そしてクールビズに因んだ28度の冷気に包まれる館内、その一角にあった木製のチェアに腰を下ろすと、目の前には石で繋ぎ合された光沢のある彫刻がうねりを帯びて、壁一面を覆っていた。

高野は待ち合わせの時間からおよそ20分遅れてやってきた。紺色のTシャツに紺色のジーパンという実に理系なその無情緒なるファッションセンスに一瞬目を憚りそうになったが、特に気にしないように努めた。

今日はギユスターヴ・モローの展覧会が行われていて、和樹は高野と親睦を深めることを目的に誘ったのだが、彼の頭の中には美術という要素は一切なかった様で、作品を傍観しながら、時々科学の視点でそれについて語っていた。

「ちょっと休憩するわ。自販機ない？」

高野が休憩を申し出たのだが、彼は作品をまだ深く味わいたかったので、一人でモローの描く光と人物に見入っていた。モローの絵には鋭い光があった。雷光がキャンバスの中の人間を叩きつけるように、それは人間を天から支えているようにも感じ取れ、地はいつも

暗闇に満ちていた。それは和樹にとって何を意味するのか、まだその時は理解出来うるものではなかった。

自販機のスペースに腰を掛けていた高野の元にやってくると、講義の話になった。

「和樹、この前の現代物理学？のレポートのことだけど、あれもう提出した？」

「ああしたで。あの講義のあと、図書館籠っている調べたんや。」

「何調べた？」

「『ハイゼンベルグの谷』について。俺はさ、たっちゃんみたいに頭ん中が科学になっとらんで、芸術の視点から書かせてもらったわ。」

「…。」

会場の片隅に学芸員が座っていた。彼女の膝の上には赤いナプキンのようなものが掛けられていて、二人を見つめていた。

和樹は彼女と目が合うと、そのいかにも風刺の効いた学芸員らしい格好に、幾分か興味を覚えて何かを感じ取った後、再び高野の方を向いた。

「…『ハイゼンベルグの谷』って何？」

「…ああ。あれ、あれや。あのな、元素の周期表をな、ポテンシャルエナジーに沿って3次元表示すると、まるで山岳のような風景になるねん。」

「そうなのか、何て書いた？」

「うーん、あの谷にな、意味はないと思うんやけど、そこにさロマンティックな想いをぶつけてみて、科学じゃなくて思想として書かせてもらったんや。全然ケミストリーやない文章になったけどな。」

科学思想ってところか。」

「…よく、わからないわ。」

「…ふつ。」

高野の言葉は無機質だった。彼は手持ちのペプシコーラを飲み干す

と、備え付けの群青色をしたゴミ箱にそれをスツと落す様にして捨てた。暗がりには居る二人を無機質な佇まいで照らす自動販売機が、まるで和樹との会話を傍観しながら聞いていたかのように思えた。モローの絵にも、人間の闇を照らす光があった。彼が描きたかったものは人間なのではないかと和樹は思うようになっていた。高野は芸術に関心を持つ様な雰囲気は微塵にも感じられず、彼が気になっていたのは美術作品の保管方法や、劣化を防ぐための工夫などだった様で、美術館を出た後のバス停で彼はそれを熱心に語っていた。だが、和樹には彼の言っていることがどうも味気ない感じに思え、帰り路に科学と芸術の共通項を模索することに懸命になった。下宿先のアパートに帰ってから、和樹は由愛からのメールに気付くと、冷やしておいたウォッカを飲みながら開いて読んだ。

Subject: 無題

宝来、もう嫌い！もう私の前に顔出さないで。じゃあ。

メールを読んだ後、和樹は再びウォッカを口につけて、アルコールのせいかわいさのせいかわからないが、妙な寒気が背筋を這った。和樹の部屋の下に住む住人、それは中年の男女のようなのだが、今夜も喧嘩をしている。女の方は泣くようにして喚いて、一方で男の方が怒鳴っているといういつもの構図だった。

ウォッカを何杯か呑み続けていると、寒気が次第に熱気を帯びてきた。

次回提出する予定のレポート上に彼はウォッカを間違っって少し溢してしまった後、ふいに玄関にフラフラと向かいスポーツサンダルを履いて、下の階の住人の所に向かう。錆びついた階下への金属製の階段を下りた後、その男女の住む部屋のドアの前まで来て、一旦ドアの前から垂直に離れられる所まで離れてから、走ってきて一発本気で蹴りを入れた。

「…さあ、明後日提出のレポートやるか。」

和樹は今日の美術館で配布されたパンフレットから、一枚モローの絵選んでから切り取ると、銀色のタイルの貼ってある写真立てに飾った。彼の瞳には少しだけ涙が滲んでいた。

佐竹

都内某所にある喫茶店を営む佐竹伸二は幾分か変わった人間である。彼は表向きは選びに選んだコロンビア産の豆を焙煎し、薫り引き立つ旨みのあるコーヒーを入れるただの店主であるが、この店では占いも同時に売りにしているという。彼は先日、中年の女の恋愛相談に乗って、恋の行方の吉凶を占っていた。

「…それで、彼はどんな方なんですか？」

「えーっと…。それが…」

「…とっても恋してるんですね。」

「えっ！？そんなことないですよっ！！彼、忙しくて最近会ってないの。」

「…。…コーヒーどうぞ。」

「…はい。」

女の瞳は戸惑いを隠せなかった。嘘をつく女というものの本当の姿は必ず瞳に出るからである。正確に言うならば、睨むようにして微笑むのである。嘘の裏には必ず真実があるのだ。

「それで、彼のことが好きで好きでしょうがないとのことなんです。いま占った干支の判定でも、その彼とは良好な関係が築けると出ておりますよ。ただ気になるのは…」

「いや、好きじゃないですよっ！あんな男…。でもお、気が付けば連絡してしまっんです。」

「…。」

彼は手元の水晶の中に、女の真実の姿を霊眼で見出していた。

水晶の中にはどこかのネオン街のような光景が見える。そこには多くの男女が何かパーティの様な賑わいを求めて集っていた。ただ、その賑わいはどこかおかしく、男も女もみな異形の姿で、生々しい姿をしているということであった。

彼はすうっと息を吸い込んでから、その水晶に息を吹きかけて、自

分の分身をその水晶の中に送り込む小さな儀式をすると、突然入神状態になった。目の前の女は彼が突然居眠りのような状態になってしまったので、びっくりしていたが、占いの継続中であるのだと認識して無暗に起こす様なことはしなかった。

水晶の中の世界へゆく

…ここはどこだ？…あつ、そうだった、そうだった。私は占い中、ここに来たのだ。おお、おつ、人が集まっている…。じゃあ、行ってみるかな。…彼女もこの中に居るんだっただけなあ…。

私はネオンの中に集う人たちの所へ向かった。遠巻きから見ている限りでは派手でとても賑やかな雰囲気思ったのだが、近くに来てみると意外なことに気がついた。

派手な身なりをした男女がその獰猛な口から涎を垂らしながら、何かを見つめている。私の脇に立っている男は上半身裸で屈強な体つきをしていて、ギラギラと油を塗ったかのように照かっていた。その男女が見つめる先には、何か肉の塊のようなものが鉄棒の様なものに巻きつけられていて、呻き声みたいなものが聞こえてくる。

私は目の前の女でよく見えなかったので、「すみません。前いいですか？」と申し出ると、その女は聞こえていなかったのか、きやは…と笑っていた。その女の横に来て、顔を見ると顔がドロドロに溶けていたのだが、よく見ると…、なんと占いに来られたあの女、彼女であったことに気付いた。

「あつ、ここに居たの？」

女は一向に私に気付こうとしない。そして目の前の鉄の棒に目をやると、二人か三人の人間？が、男か女なのかよくわからないのだが、もう人間の形をしていなくて、肉の塊の様になってグルグルと鉄の棒に巻きついているという光景だった。その鉄の棒もぐるぐると回っていて、よく見ると大きなペニスが肉の塊から出ていて動いている。私は茫然とそれを見てみると、その鉄の棒に巻きとられている男？が「助けてくれ〜！」と周りの男女か私に対して呻きだした。そして、私は後ろを振り向いて彼女の手を握った。

「さあ行くか。」

彼女は私に連れられて、そのネオン街を後にする。ネオン街の外れは暗くて、古びれた旅館のようなものが立っていた。

水晶の中の世界から戻ってくる

「。。。はあ。あー。ん。。。」

「大丈夫ですか？」

目の前で女が彼に尋ねていた。コーヒーはもう半分以上無くなっていて、数分の時間が経過していたのだと彼はここで気がついた。

「ああ。。。あの彼のことですけれどね。んー、何て言ったらいいかな。。。好きっていうのにも種類があると思うんですよ。」

「はい。。。」

「。。。あのですね。。。“利用すれば利用される”ということ、忘れないでくださいね。」

「うっ。。。」

「。。。ごめんなさい。とにかく（寂しいのは分かったけども）もっと自分の気持ちを大事にしていきましょ。何か趣味に励むなり、ただ機械的に仕事するだけじゃなくて、自分の大切にしていきたい道みたいなものを持たれると宜しいのではないかと。」

目の前の女が泣いていた。しかし、彼は動揺することは一切なかった。

「彼のことなんですけど、お互いの本心を隠す様な曖昧なお付き合いばかりしてしないで、もっとお互いに労わりあう様な、いえ、出来ることならば支え合えるような、そんなお付き合いの部分も持たれてみたらいかかですか？」

「別れた方がいいと？」

「私はそう簡単には言えませんが、色々な段階でのお付き合いというものがあるのではないんですかね？」

女は手元のコーヒーに口をつけてゆっくりと飲み干した。女は次第に落ち着いてきて、彼に優しく微笑むと、手持ちの蛇皮調のバッグから、財布を抜き取った。

「お幾らでしたっけ？」

「…、430円です。」

「えっ？ たったそれだけ？」

「コーヒー代だけで結構ですよ。」

彼も微笑んで、女にそのように述べた。窓の外は、先程まで降り注いでいた雨が止み、空には大きな虹がかかっていた。

多江子

午後8時26分、多江子の携帯が鳴った。

「多江子〜。いま何してるの?？」

「…あー! みつちゃん? いまテレビ見てるよ!」

多江子はポテチをつまみながら、ソファアの上でテレビ画面に映る一人の男を見ながら大笑いしていた。

テレビの中には、今人気のお笑い芸人、島村がマシンガンのようなトークを放っていた。

「あのさあ、例の彼のことなんだけど…。」

「…なに〜っ? なに? ? 聞こえないっ〜! !」

「山下君のことよ。」

多江子はテレビに夢中だった。島村の話が面白くて面白くて仕方が無いのである。

「山下? ああ、山下君ね。あの男はあんたに向いてないわよ〜!」

「…あははは。そうかもしれない。」

多江子はやっぱりテレビに夢中だった。

「最近、お腹の調子が悪いの。」

「どしたの? 大丈夫? ? …あはははは! 島ちゃん〜! !」

「うん…。」

二人は時間を忘れて話しつづけた。時計は午後10時を指していた。

「あ、そろそろ寝るね。」

「うん! じゃあまたね〜! !」

多江子は電話を切ると、ソファアにうずくまって直ぐに寝てしまった。

次の朝、また電話が掛かってきた。

「おはようございます。多江子さん? 今日どうします? ?」

「あーおはよ、山下君。今日ね…、10時から…」

多江子はあることに気がついた。彼女がソファアの下に落としてい

た、ポテチのくずに蟻が行列を作っていたのだった。

「それで、あ…、蟻が、蟻が、行列を作ってる…。」

「えっ？どしたんですか？何かあったんですか？？」

電話の向こうで、山下が戸惑っていた。

「蟻よ、蟻。蟻が行列を作っているのよ！！どこから入ってきたんだろう？」

「えっ？蟻？蟻？？えっ？？…ありりりり！！」

「あははははははは！！！！」

多江子はそれを聞いてまた大笑いした。今日もまた多江子の一日が始まった。

竿紀

今日から新年度が始まり、新しいクラスで学校生活が始まる。五十嵐竿紀は休み時間、自分の席に座って新しいクラスメートの雰囲気を経験していた。

教室の後ろの方で男子が騒いでいる。竿紀は自分の作った美術作品が、その男子達の目に留まって、かわれているのを若干面倒に、厄介に思いながらも、自分の席からその作品の良さは何だとか弁明をしていた。しかし作品の評価は自分がするものじゃない。評価はいつも他人が決めるのだ。そして作品だけではない人物の評価も他人がするのだと反芻していた。『自分の評価は他人が決める』という意見がどこかにあったのだと思いだしたからである。

休み時間を終えて、ホームルームが始まった。クラス運営に関して担任の増岡先生が意見を求めた。すると優美で儂げな、少々肉感のあるクラスメートの美羽が席に座ったまま、こんなことを言い始めた。

「竿紀君の考え方に賛成です。竿紀君は去年……。」

去年、竿紀は真面目に生きていたのだ。大局的かつ几帳面なほどに一徹に、何らかの美学、自分の美学を信仰していたのだ。それは莊子にあるような無為にただ自然に生きるのではなく、自然を理解し死することのような、極めて反逆的なエネルギーの使い方だったような気もする。その姿勢に美羽が何か共感をしたのだろうか、新渡戸稲造の『武士道』に共感するような、そんなロマンを見出していたのだろうか。いや、本当のところはどうかは分からない。竿紀は彼女の顔を見ながら、俺のどこが魅力的なんだろう、相対的に共有出来難い一つのシナリオに生きている、宇宙のプログラムに組み込まれていたバグのような、追えもできず去らせもできず、変種の何かみたいなの……と想っていた。

「あの人、自分のことが好きだよな。」

前に座っていた静子とその隣に座っている健司に小さな声で言った。増岡先生はそれを見て見ぬふりをしながら、黒板に『正』の文字を並べ、多数決による意見投票を重ねていた。二人はホームルーム中に回し手紙をしながら、男女で辿りついた結論みたいだ。

睦言を交わす二人は愛し合っていた。去年、二人は別々のクラスだったのだけでも、学内では有名なカップルで、今年のクラスメートの胸中は複雑な気持ちだった。男女の愛はいつも排他的だから、学校という場所には似合わないのだと竿紀はこの学校に入る前から、初めから気付いていた。

「熱々だな、健司。」

竿紀と“同じ趣味”の重田がからかう。竿紀はそれを見て頷きながら、美羽に目をやった。彼女もただ頷いていた。

低学年のあるクラスの子たちが、今からバスに揺られて大人たちに買われてゆくのだという。それは一種の通過儀礼のようなもので、高学年は古い人間なのだろうか、若者に先を越されたのだと妙な劣等感を抱きながら、そのような儀式は私たちの文化には無かったのだと言いつつ聞かせている。

だけどそれだけじゃ何か物足りない、もっと具体的に、いや出来ることならばもっと主体的に、それを出来ないのかと思うようになっていた。

バスに揺られて闇夜に去ってゆく子供たちの顔は、窓越しに皮肉と憎悪と優越感に満ちているように見えた。それは人間性を裏切ることへの背徳感、美羽の希望を台無しにしてしまうみたいな想いそのものみだいに。

しかし竿紀は別に美羽のためにあのような武士の道、夕オを見せたかったわけじゃない。彼はただの凝り症なのだ。凝って凝って仕方が無いだけなのだ。

美羽の友人の理枝が言った。

「私たちもしましょうよ。」

理枝は憮然とした表情、どっしりとした声で言った。すると静子が

いやらしい顔をして、それを煙たがった。私は満たされていると信じたかったからだ。

こうして、新しいクラスメートが到着した体育館には虚飾がなかった。ただ、それでも満たされない想いは一条の光を求めて、まさぐるように一人の男は一人の女を求め、一人の女は一人の男を求め、巢立った。

最初に巢立った男は竿紀の親愛なる人の元へ行ってしまったので、このとき初めて悔しい想いを抱いたのは、真実の感情で、それはやがては一抹の劣等感に繋がっていった。

人間はきつとそのようにして、劣等感という見えない鎖を繋いでゆくのだ。

「次の人。はい、次の人……」

竿紀の番が回ってきたのだが、竿紀は何故か自分だけ愛されることに強い不安を抱いて、その場に立ち尽くしていると、次の人が先に求めて行ってしまった。

竿紀は愛されることなんてとんでもないと思っていた。だから竿紀はこう言った。

「じゃあ、逆に俺の所に来る人、この指とまれ。」

すると、直がやってきた。直は彼にとって親愛なる人ではなかった。しかし、直は自分は完成された女なのだと言い張った。竿紀にとって、それは人間ではなく物体のような気がした。

静子と健司はこの会場に来ることはなかったのだと確認してから、竿紀はまた親愛なる人を見た。

「池沼君はまだまだだね、また今度！ 八重田君は……、はい、また来週ね。芝山君……。おいで、おいで。いいから私の所においでよ。」
竿紀は自分のわずかに残った恋情と共に、「ああ、人間ってものは、何て罪深くて、愛しいものなのだろう」と思った。

静子と健司は今頃、どうしているのだろうか。まだ彷徨っているのだろうか。

竿紀は現実で責められることは人間真理のある裏面なのだということ

とに気付いて、いま目が覚めた。

山本

「俺さ、ずっと見てたんだけど。」

山本巧が重田に言った。

オリエンタルな情緒漂う店内には、木製の古い茶色のグランドピアノがあつて、ドイツに留学していた宇都宮海晴というピアニストが、エリック・サティの『ジムノペティ：一番』を演奏していた。

厨房がカウンターに隣接していて、中で調理師達がシャンパンをゼラチンで固めたような特製のデザートを作っている。それで、おかしなことに厨房の壁には天狗のお面が釣る下げてあつて、山本は不思議な違和感と共にただならぬ好奇心をこの店に抱いていて、目を輝かせていた。

「あのさ、この店、なんか変わってるよね。店員は洋風で、店内は東洋？な感じで、厨房には天狗のお面だよ？…それでさ、宇都宮さんはサティだよ？変な店だよな？」

「うるせえなあ。聞こえねえじゃねえかよ。」

重田は手元の七面鳥にフォークを刺して、口にそれを運んでいる。

山本の話は聞き流して、宇都宮さんの演奏に耳を傾けていた。

「サティってさ、力があるっていうイメージより美的なイメージがあるんだけど、サティって…」

「…うるせなあ。」

「…。うーん、サティって男性なのかな？」

重田は山本に目を合わせ無くなった。彼はフォークを置いて、彼女の演奏をじつと聴いていた。

宇都宮の演奏が終わると、店内に居た客は一樣に拍手をしていた。

重田は席を立ちあがりただ拍手していた。山本は俯きながら、何かぶつぶつ言っている。

「…サティって男性なのに、ラヴェルも男性なのに。…何で印象派の楽曲ってのは、女性に演奏させると良くないんだろう。」

重田が席に着いて山本を見ると、山本は手元のナプキンを小さく折りたたみながら、まだ何かぶつぶつと呟いていた。

「巧、何してん？」

山本は重田を見た。

「…うーん、重ちゃん。やっぱり、印象派の曲は女性に演奏させちゃ駄目だよ!!」

すると山本が席を立ち、何か叫び出して凄じ勢いで服を脱ぎ始めた。店内の客が山本を凝視し、宇都宮が取り押さえた。

「アポロン万歳！アポロン万歳！」

山本が叫んでいた。ピアニストの宇都宮が目の前でそれを傍観し酷く怯えていた。厨房の中に居た、調理師が何かを持って駆けつけてきた。

「この天狗野郎め!!」

すると山本の顔に勢いよく天狗のお面を被せ、彼は下半身素っ裸のまま大人しくなると、礼儀良く店内の人々に頭を垂れた。それを見ていた目の前の重田は、やっぱりこの店は変な店だなどと思って、煙草に火をつけて溜息を吐いた。

…という夢を重田は今朝見たのを思い出した。

桜木

鳴門の海は青と白の飛沫が、飛翔する鷗の鳴き声と共に、混じり合
いながら歌を歌う場所なのだという。

節子は有給休暇をこの日のために使って、桜木深雪とささやかな婚
前旅行に当てた。婚期は今年の十一月だという。挙式は神前で行う
と二人は話しあい、親戚家族と近い友人だけを集めて行うことに
した。

海峡に佇む公園施設には、入園料を徴収する受付の老女が金属製の
スツールに腰を掛けていて、二人に豊やかに会釈をし迎え入れた。

「お二人様でしょうかね？…大人二枚、一四〇〇円でございます。」

桜木は二つ折りの財布から、樋口一葉を一枚抜き取り、老女へ手渡
した。節子は隣で麦わら帽を脱いで右腕にそれを抱えた。そして、
受付に置いてあった刺繍の編み物を手に取り、その色や形を味わっ
ている。彼はお釣りを老女から受け取ると、節子の方を振り向いた。
「これ、渦潮の模様よね？刺繍するの大変だったんじゃないかしら。」

「ああ。」

彼はその編み物を手にとって、両手で何度も揉みし抱くようにして
触れてみた。

「中々しつかり編み込んであるな。鍋敷きかなこれは？」

すると、受付の老女が言った。

「はい、そちらは地元の手芸愛好家の方々が作ったものなんですよ。」

「そうでしたか。とても温かくて素朴な感じがいたしますね。」

節子が彼女に述べると、桜木は再び財布から野口英世を二枚取り出
して、彼女に丁寧に手渡した。

「お一つ、頂けないでしょうか？この渦潮模様と手で一つ一つしつ
かりと編み込んである感じが気に入りましたよ。」

「左様ですか。お客様、少々お待ちいただけますか。」

すると老女は受付の奥へ向かった。どうやらこの鍋敷きの編み物には色違いがあるようで、奥の座敷から青と白、緑と白、朱と白、黒と白の四種類の品を持って来られた。

「わあ、こんなに種類があるんですね。…あなたどうする？」

「うーん。」

桜木は節子の好みを察しながら、顎の辺りを右手で抑えていた。節子が最初に取ったものは硬い毛糸で編まれた青と白の鍋敷きで、彼女は彼女がきつと最初に選んだものがよいのではないかと思っていた。「最初に選んだものがいんじゃないか？」

「そう、私もそう思ってたのよ。でも、あなたはどう思うのよ？」
彼は彼女から自分の意思を尊重されているのだと有り難く心に触れてから、それに答えようと目の前の鍋敷きに目を凝らした。やはり渦潮なのだから、青と白の物がいいに決まっているし、それが自然に美的ではないかと思っていたが、黒と白の鍋敷きの方がモダンで知的な風貌にも感じられた。しかし、彼が黒と白に惹かれるのは少年の頃の様な生き活きとした感性を乏しくしてしまったからではないかと思っていると、数十秒の沈黙の後に青と白の編み物の方を手にとった。

「節子、僕はやっぱりこれがいいよ。黒と白の方はモダンで御洒落に思えるけども、青と白の方がこれからの僕たちには向いていると思うんだ。」

「どういふこと？」

受付の老女が、べっここの眼鏡に手を掛けながら、二人の会話を見つめていた。

「…この色の方が自然な気がするんだ。僕は君とこれからナチユラルでありたいんだ。かっこつけた様な恋をするみたいは、不自然な大人のような子供を気取って、味わいのない付き合いを君としたいくない。二人で味のある自由を分かちあっていたいんだよ。」

「…。」

すると節子は抱えていた麦わら帽子を再び被ろうかとしたが、ふいに桜木の頭にそれをポンと被せて彼を見つめた。

「…こんな感じかしら？」

彼も節子を見つめて、大きく頷いた。

「うん、そうだな。」

桜木は受付の老女に代金を払ってお釣りを受け取った。二人は老女にありがとうございましたと述べてから会釈をして、渦潮の見える園内まで仲睦まじく手を繋いで歩いていった。まるで鴟の番いが二羽、歌を歌うかのように楽しそうに歩いていった。受付の老女がそれを微笑みながら眺めていたことなど、二人はいざ知らずに。

美羽

赤坂にメトロで着いてから、僕は美羽を待っていた。足元には煙草の吸殻が幾つか落ちていたが、僕が捨てた吸殻じゃない。僕はいつも携帯灰皿を持っているし、寧ろゴミを捨てる人間ではなくてゴミを捨てる人間だからだ。

先日は地元のコンビニエンスストアの前で、ある男が車の窓から捨てた弁当の入った袋を、男が忙しそうに去った後にわざわざ拾って、備え付けのゴミ箱に捨てた。それを見ていた別の車に乗っていた色黒の女が、感心そうな顔をして僕のことを見ていたが、僕はそれに別段、心地良く人間的に優越するような気持ちを抱いたわけでもなかった。

今日は美羽が明日の夜に大阪に引越すと聞いていたから、恐らく最後の別れの意味で僕を赤坂に呼び出したのだろう。学生時代はいつも二人で歩いていた赤坂の街。しかし僕には特別な思入れがあるわけじゃなかった。僕たちはいつも落ち付いているようでいて、学業やら何やらで忙しかったし、このような光や色が犇き合う街を歩いているのも、それは僕ら二人については淡い風景にしかならなかったと思う。それに美羽はいつも僕と居る時は、決して作り笑いなんかすることはなかった。キャンパスでは彼女はどちらかというと派手な部類のグループに所属していて、誰かが何か喋ることに対しては、彼女は作り笑いしていた。でも、僕の喋ることには真剣な眼差しで時々複雑な表情を示しながら、ただ聞いていたことを昨日のことの様に覚えている。僕は微笑む彼女も好きだったけれども、微笑んでいない時の何とも言えない女性らしい雰囲気を漂わしている彼女が愛おしくてたまらなかった。何かを感じているときの女性のあの雰囲気だけが、僕が一人の男性であるのだということ深く実感させたからかも知れない。

四時半、僕の前に一台の車が止まった。M a j e s t a の中には一

人に見慣れない男が運転席に座っていて、バックシートの窓には黒いフィルムが張ってあって中がよく見えなかった。するとその後方のドアが開いた。美羽だ。淡いベージュのワンピースを着た美羽がその運転手の男に会釈をすると、僕の元に小走りやってきた。

「…待った？」

「いいや、着いてからあつという間だったよ。」

僕は美羽に嘘をついた。もうここで40分待っていた。しかし、僕にとって現実的時間の流れは、アイデアを求める思考活動の中ではない。気温や湿度、気象が僕の人体にとって不快ならば、きつとその40分は長く感じたに違いないだろうけども。

その後、美羽と僕は見附の繁華街にある喫茶店に入った。

「大阪に引越すんだって？それも明日、夜って。」

「ええそうなの。急な転勤だよね。」

「そうだね。…それで、どうして今更僕に連絡を。」

美羽はシルバーのリングをはめている手で自分の髪の毛を二度解いた。彼女の手はこんなに小さかったかなと僕は気付いて、手元のコーヒーに口をつける。

「勇樹君に伝えてなかったことがあるの。私のお父さんが…」

美羽は僕に真剣な顔をして、時々俯きながらそう言った。

「…そうだったんだね。今までそんなこと一言も言っていなかったのに、やっと今日話してくれたんだね。」

美羽の父親がガンを患っていて、もう余命が短いのだという。僕は何の力にも慣れそうになかったが、その後も彼女の話にずっと頷いていた。

つい先日、僕たちは別れようと話しあっていた所だった。別に僕に熱烈に好きな人が出来たとか、美羽にも好きな人が出来たとか、そういうわけではない。僕は美羽と一緒に過ごした日々はこれまでに無いほど幸せな日々だった。お互いを奪いあうような、傷つけあう人間関係に疲れていた僕にとって、彼女は儚く遅く咲いた一輪の

花だった。だが僕は美羽に対してある劣等感を抱いていた。生まれも育ちも違う、居る所は同じでもこれまでの自分の歴史と、これまでの彼女の歴史の圧倒的な違いのようなものを感じていたからだ。美羽は綺麗だった。僕も美羽と同じ綺麗な所に居た。けども、僕は彼女と比べて偽物のレプリカみたいなものだった。僕は僕自身のことを血を飲んできて、美しさを保つような偽善者のような気がしていた。だから僕は、美羽と付き合う様になってから似たような偽善者としか結局は付き合えないのだと深く悟っていたのだ。

君が何か僕のやることなすことに感動するたびに、僕は心の中で深い落胆のようなものを味わった。いや、今思えばこれは僕が君に対する仕事だったのかもしれない。君が君自身を経験するために、きっと僕が必要だった。僕は血みどろになって君に綺麗を与え続けようと最初から心に決めていた。けれども現実存在として、一組の男と女が綺麗だけを分かち合って生きて居られるだろうか。

僕が君を初めて求めたとき、君は抗った。君は僕に「優しくして」と願った。君が本当に欲しかったのは…、そう男性の恋情ではなく、愛情だったのだ。そして君が欲しかったのはきつと僕じゃなかった。君が欲しかったのは君自身、君自身の中に潜む愛情だったのだと、あの晩気付いた。だから、今後交錯することのない人生を予感していた僕は、僕は君に綺麗な思い出だけを残して行って、君に別れ話を切りだすことにしたのだ。

「それで大阪に越してから、父親の元へはどうやって見舞いに行くの？」

美羽は時計を見ながら、再び僕の方を見て何かを言おうとした。

「…。」

しかし、美羽は何も言うことはなく、その後5分ほどただ沈黙していた。僕はコーヒーを飲み干して、500円玉を一枚テーブルの上に置いて、店を出た。

赤坂の空は淡い青紫色に染まっていて、細やかな雨が降り出していた所だった。“僕”はそういう難しい人間なのだ。

霧島

「霧島君、女の子になんか興味あるの？」

静子が僕にそう言った。タペストリーが店の暖炉の上に飾ってあって、目の前のグラスにはロゼが注いであった。僕は静子の顔を見て、何度か視線を逸らしてから、向こうに居るウェイターの蝶ネクタイがどうだとか、店の雰囲気はどうなのだとか、そういうことに気を向けていた。

「聞いているの、霧島っ！」

「…。」

僕は目の前で睨んでいる静子にしぶしぶ目をやってから、またウェイターの蝶ネクタイの方を見て楽しんでいた。蝶ネクタイが微妙に45度傾いていて、僕はそれをどうにかしたくて仕方が無かったのである。

十年くらい前に『ツンデレ』という言葉が一時期流行語になって、オタクの世界では有名になっていたみただけども、僕は目の前の静子に無理やりツンデレという代名詞をこれまで当てはめてきた。でも、本当は彼女は僕の中ではツンデレな女の子じゃない。ツンツンだ。いや、ツンツンツンだ。彼女みたいな“女の子”には、デレデレの男が一番のお似合いなのだと思うて、何かぶつぶつ独り言を言っている隣の健司に耳元で言った。

「…おい健司。…出番だぞ。」

僕は健司の太もも辺りをつねった。すると嬉しそうに微笑んだ後、こう言った。

「…馬鹿野郎、おまえはもっと女の気持ちってものを知った方がいいんじゃないかねえか？」

さつきから何かぶつぶつ言っていると思ったら、そんなことを言っていたのかと僕は思った。一発殴ってやるうかと思っただが、ウェイターの手前、僕はこの二人の前でそれを堪えていた。

さっきの蝶ネクタイのウェイターが伝票を僕の元に持ってきたので、僕は自分の首の所に触れる仕草を彼に見せると、彼は自分の蝶ネクタイに気付いて元の状態に戻してくれた。僕はホッとしていると、今度は静子がウェイターにもう一本“負けじ”とワインを追加注文していた。

「ちよつと、僕はトイレ行って来るよ。」

僕は静子と健司に軽く会釈してから、レジの前に居たさっきの素敵になったウェイターにも会釈をしてそのまま店を出た。

その後、僕は雪の降る下北沢の街を一人で歩いていた。ヴィレッジ・バンガードという雑貨屋に入って、プラスチックで出来たダイヤが埋め込まれたおもちゃの眼鏡を買った。今頃、静子と健司はどうしているのだろうか。そのように心配している僕はどれだけ他人想いなんだろうと思ったりもした。きつと今頃、僕が代金も払わずに店を抜けて出て行ったことに対して、何か口論しているに違いない。

僕はおもちゃの眼鏡を掛けて、辺り一帯の人ばかりを見た。すると、街をゆく老若男女が、みんな疲れた子供みたいに見えてきた。このおもちゃの眼鏡を通して、目を凝らして見てみると、どうも若者にあやしてもらっている老人や、老人にだだを捏ねられている若者みたいな、いろんな人種が入り混じっているように見えた。僕は何度も不思議に思った。このピンクのおもちゃの眼鏡で人々を見渡すと、人間が肉体の年齢ではなく魂の年齢で見え聞こえるようになるからだ。

小雨が降り出したので裏道に入ったら、イタリアンなパスタ屋の前で男の子が母親から何かつまらないことで叱られていた。しかし、僕にはその男の子が巨人のような、滝のように水しぶきを上げるような、大きな存在に見えていた。脇で何やらぐじぐじと叱っている母親の方を見ると、犬にもやしが生えたような感じに見えて、僕は思わず笑ってしまった。幼い、いや若いのだ、自分の息子よりも。

小雨が降りやむまで、裏道で煙草を吹かしていた。僕は今度は表道に出ようとすると、一人の中年の陽気な男性に声を掛けられた。

「お兄さん、ちょっと僕と遊んで行かない？」

するとその中年は僕の華奢な腕にはち切れんばかりの腕を絡ませてきた。…なるほど、彼はゲイなんだ。

「いいけど、“僕”は“君”を満足させることは出来ないよ。」

すると、彼は寂しそうな顔をしてこう言った。
「そう、残念だな。…いつでもこの店で待つてるからさ、良かったらまた来てよ。」

僕に特製の名刺を渡してきた。彼の好意を受け損じるわけにはいかないから、僕は代わりにポケットに入っていた飴玉を一個彼に「ありがとう」と述べて渡した。そして、別れ際手を振ってから会釈した。

再び淡い小雪が降ってきた。街ゆく人々はみんな疲れていたけども楽しそうだった。ある店の角で、一人の美女と出会った。街頭で店の商品を宣伝していた所だった。

「これ何の商品ですか？」

長髪の彼女は、美しい微笑みで僕にそれを説明してくれた。

「シャンプーです。髪が赤ちゃんの頃みたいにサラサラになるシャンプーなんですよ！」

そうか、なるほど。だから彼女の髪の毛は、サラサラと彦星と織姫が巡り合う天の川みたいに輝いているのか。雪の結晶が彼女の頭に流れ星のように幾つか降ってきていた。

「ちょっと写真撮らせてもらえませんか？」

すると、彼女は一瞬強張った顔を見せた。

「あなたみたいな美しい人を、今日の思い出に残せないことは悔い
ますからね。」

僕は無理やり写真を撮った。彼女は実は写真に撮られることを苦手としていたのであった。お礼を述べてから、僕は再びピンクのおもちやの眼鏡を掛けると、駅の方を指して歩いていった。すると駅の改札に健司と静子が居た。健司の方は何か言いたげで、静子の方は泣いてマスカラがボロボロになっていた。

「ああ、あのまま店出て悪かったな。」
すると健司がこう言った。

「俺の父親はいつもそうやっておまえみたいに帰って来ねえんだよ！」

また、静子は僕にこう言った。

「…どうしていつも私を置き去りにするのっ!？」

そして、僕は改札の前に居る二人に土下座して謝った。改札を通る老若男女がみな僕の方を見ていた。僕は泣きながらその場を立ちあがると、ピンクの眼鏡を外してから声を振り絞ってこう言った。

「健司、ごめんよ。静子、ごめんよ。ごめんよ、ごめんよ、ごめんよ…。」

慌ただしく一人の駅員が駆けつけてきて、泣いている僕をフオロ―した。

「どうされましたかっ!？」

「…ううっ。…僕も自分でもよく分からないんだ。“僕”はなぜ生まれたときから、こういう生き方しかできないのかが。」

すると、一人の老人が僕の後ろの丸椅子に腰かけていて、ぐずぐずと泣いていた。また、もう一人僕の脇を老女がまるでお悔やみを申し上げるかのように、「御苦労さま。」と述べて通って行った。

そして、紺色の警備員の制服のようなものを着た駅員が僕の顔を真剣に覗きながらこう言った。

「…お兄さん。僕はもしかしたら、あなたと似たような人かもしれない。だけでも、僕は一度“自分”を裏切って、“自分”だけの人生を歩むためにこうやって駅員として生活しているんです。」
僕はその駅員の顔をまじまじと見た。そういえば僕の兄弟と似ていた。

「…すみませんが、どうか、健司と静子を大事にしてやってください。」

僕はその駅員にも深々と頭を下げ、改札を出て行った。健司と静子がどんどん僕の視界から遠くなって、小さな点の様になっていく

のが見えた。だけれども、健司と静子の心は、いつまでもいつまでも眠ったままなんだ…。

将恵

ガタン……。ドアが開いた。母の将恵が帰ってきた所だった。

「お、おかえり。」

母は疲れた顔見せながらも僕に微笑んだ。手持ちのシヨルダーバッグをダイニングのテーブルの下に置いて、冷蔵庫から天然水の入ったペットボトルを取り出して、グラスになみなみと注いだ。そのグラスは黄色い縞模様が入ったお洒落なグラスなんだけども、この前母と僕が100円シヨップに行つて買った安物だった。だけでも、近頃の100円シヨップというものは、目利きの利く者からすれば中々お洒落なものも置いてあるのだ。

「ただいま。ああそうそう、武……、店長が辞めちゃうかもしれなかつて。どうしよう、私が代理で務めることになりそうよ。」

「ああ、山本さん？辞めちゃうの!？」

「そうなのよ。どうしたのかしらね……。なんか、山形に帰省しなきゃならないことになりそうなんだつて。それも長期……。」

「へえー、実家は山形だったのか……。」

僕はいま高校三年生だ。来春は文京区にある、とある大学の理工学部を受験し合格するため、いまは通信教育の教材を使いながら、受験勉強を重ねている。

「武、憲二郎君は今日結局家に来たの？」

母が僕にそのように尋ねるわけは、憲二郎は僕の家に来ると勝手にシャワーを借りるのが常だからだ。

憲二郎とは幼馴染で、よく幼稚園の頃とかは家でファミコンしながら遊んだものだ。最近は憲二郎がバイトが忙しくて会うことは減ってきたが、それでも週に2回は顔を会わす仲である。彼は今日、家に来てこんなことを言っていた。

「マジ疲れるわ、バイト先の店長。」

「疲れるんだね。店行ったこと無いから分からないけど、居酒屋っ

て結構ハードそうだな。」

「ああああ……。昨日さ、フライヤーの油抜けて言われて抜いてただけど、熱くて熱くて……。ほら、やけどしちゃったよ。」

「うーん。ケンちゃん、やり方下手糞なんじゃないの？」

「うるせー！おまえ、やってみるよ。あれ、運ぶ時すげー熱いから。」

「で、店長に何て言われたの？」

「『てめー、熱いとか抜かしてんじゃねえぞ！』ってキレイながら言われてよ。」

「ああ、そう。」

「うん……。まじ、油を入れたドラム缶、蹴っ飛ばしてやるうかと思っただぜ。」

憲二郎は僕にいつもそのような愚痴を聞かせてくれる。

「うーん……。」

僕はその後、彼に上手なやり方を店長に教えてもらったら良かったんじゃないのと言ったら、「仕事は盗んで覚えるものだ」と、真顔で言われたらしい。まあ、確かに忙しい職場だったら、そういうものかもしれないと思って、僕は納得していた。

「ああ、そうそうシャワー貸してくれねえ？汗吹き出しそうだよ。」
僕はいつものように、シャワーを貸した。でも、母の将恵は風呂場を勝手に使われるのが嫌なので、僕は内緒にすることにした。

母の将恵は今日の新聞に目を通していた。先程の質問に対して僕は答えた。

「ああ、ケンちゃんは今日はバイトだったから、来なかったけどね。」

将恵は訝しげに納得しながら、飲んでいたグラスを流しに入れると、テレビを点けて夜のニュースを見た。僕は手持ちの生化学の参考書に目を走らせていた。

『血中の酸素濃度を向上させるためには、アルカリ性への親和が望ましい。この場合……』

目の前のスタンドライトには小さな蚋のような虫が飛んでいた。時計は18時45分を指している。

母の職場の店長が居なくなったら、母は代理で店長になるから家に夜も帰って来ない。すると僕は夜は一人になる、ってことは…。勉強中に要らぬ妄想を抱いてしまった。憲二郎ではなくて、彼女の理枝を連れ込んで、それで…。とか色々考えてしまったのだった。いかんいかん、こんなことでは受験に落ちてしまう、と思いつながら鉛筆をノートに走らせ、化学反応式の記述に忙しかった。

20時になって、母と食事を摂った。お土産で頂いたすけとうだらの焼き物と白ご飯、そして、味噌汁と漬物だ。母子家庭で貧しい生活ながらも、僕は充実した高校生活を送っていた。同じクラスの理枝とは、来年は別々の進路になってしまうのは残念だけでも、僕たちは親愛なる付き合いに忙しかった。特別、クラスで目立つ方ではないけども、昼はたまに一緒に学食でご飯を食べる仲だし、クラス公認のカップルってわけだ。

母が食事の後にお風呂から上がった後、「肩を揉め」と言うので肩を揉む。母の肩はとても疲れていた。固くて縮み上がった氷こんにやくみたいだ。

「ああー気持ちよかった！ 武、ありがとう。母さん、もう寝るわ…。台所の電気消しておいてね。」

僕は母に微笑んで、「どういたしまして」と言った。

今日もささやかな一日が終わる。リビング兼寝室のテレビに映っていた人気のお笑い芸人がとても輝いて見えた。

ドウユ

信也は理学部の校舎を出て、文学部と農学部の間にある庭園まで歩いた。新緑の季節が初夏の日差しを葉の波々で陰に潤している。木片の散らかった丸太の前には、二、三の大木で出来たテーブルと椅子が用意されていて、彼は学食の前の自販機で買ったミネラルウォーターの入ったペットボトルを丁寧に置いた。信也が煙草に火を点けて、向かいのテーブルに座る女性を見ていると、こちらを向いて微笑んでいた。

「こんにちは。講義はまだ始まらないんですか？」

そこには留学生と思しき女性と、黒髪の赤い薄手のジャケットを着た女性が座っていた。

「ええ、今日はもう終わりなんですよ。彼女と一緒にランチでもしようと思ひましてね。」

信也は煙草を吹かすことを辞めて、携帯灰皿にそれを突っ込むと、腕時計を見てからまた彼女たちの方へ振り向く。

「二人とも何学部なんですか？」

すると、黒髪の方が豊やかな表情で言った。

「農学部。ドウユも農学部なの。あなたは？」

その留学生の名前を聴いて、どこの国の人なのかとても気になっていた。

「ああ。僕は理学部。ねえ、ドウユさんって…、こんにちは、…どちらの国から来られたんですか？」

ドウユは信也にこう言った。

「…こんにちは。トルコからきました。」

「へえー！トルコ…。トルコって、中近東の方だね。」

彼女は困った顔を少し見せて、持っていた携帯電話で世界地図を表示して彼に見せてくれた。トルコから留学して日本に来ることは、とても高尚なことらしく、日本に来てからの暮らしや文化などに色

々と感動しているという。

ドウユはボーダーのTシャツを着ていて、ベージュのパンツスタイルだった。化粧はすっかりしていて、ピンク色の口紅は新緑に生えるような麗しき色気を帯びていた。

「二人とも農学部で何を研究しているの？」

信也はドウユの方に特に関心を示していて、色々と話がしたかった。

「畜産の研究ね。主に生産と品質について。」

「ほお。生物を扱うのって、とても難しそう。」

信也が思ったことを言うと、黒髪の尚子の方は少々の苦笑いをしていた。その後、三人は三十分ほど学内の話などに興じていた。

「ねえ、今度さ、飲み会やるんだけど、来てみない？僕はさ、シンフォニックメタルっていうジャンルのロックのバンドやってるんだ。ライブもあるから、ぜひ聴きに来てみてよ。」

信也は別れ際、そのように伝える。尚子とドウユは嬉しそうにそれに承諾してくれた。連絡先を交換して、信也は二人に手を振って、「ありがとう」と述べてから別れた。

七月三日（日）、今日は神戸にある『ロータス』という飲み屋で、信也の所属するバンドのライブが行われる日である。メンバーの北沢が信也にピックを数枚渡すと、マイクと発声の調整に入った。店の中には多くのお客が既に居る。本番前の緊張したような静けさは、若き青春の清涼感を漂わせる一夏の淡い情緒で、店の入口には幾つかの金属で出来た外国製のオブジェが飾られていた。店内の客はクラッカーとチーズの軽食と共に、ハイネケン一色に染まるうとし始めている。それは談話と友愛の宴であった。

「信也、5弦目緩いんちゃう？」

笹田が信也に忠告をする。チューニングが上手くいっていなかった様で、デジタルチューナーを使いながら、メンバー一同は440ヘルツの共鳴に息を合わせた。丁度その時だ。店の入り口付近に、緑と青の刺繍を凝らしたワンピースを着たドウユが立っていた。信也は彼女を見つめてから一息つくくと、6弦目から1弦目に向かって一

気に右腕を振り落とした。彼のライブが始まったのである。会場の空気が変わってゆく。鋭利な刃物によって生まれゆく烏達が荘厳なる空間を飛び交い、目の前に居た数々の人々を魅了した。

ドウユが信也の見知らぬ女性を連れて、会場の壁際の席に腰を掛けられている。店員がオードブルの盛り合わせや、気の利いた肉料理をテーブルに運びこんでいた。

北沢がこの日のために鍛錬してきたデスボイス。それは人間の声とは思えぬ奇怪な轟の様で、目の前に居る人々の胸を躍らせてゆく。笹田の奏でるシンセサイザーは光明の和音を奏で、熊谷のドラムパフォーマンスはその和音と共に激しくうねりを帯びて、数々の神聖な丘陵を形づけた。

四人の魅せる合奏の様々な色の光と漆黒の闇は、彼らを照らす白いスポットライトと鮮麗に激しく交わり、会場の拍手と共に物語を終えた。四人は軽く礼をしてから、楽器を片付けると、会場へと戻って所定の席についた。

「辰己、今日の声の調子、なかなか良かったと思うよ。」

信也が北沢に言う。四人は乾杯して、周りにもライブを聴いた人達が次々に集まって来ていた。

「信也さん。とても、よかったですよ。」

ドウユだ。隣には見慣れない外国の女性がもう一人居た。

「くんばんは。この前はどうも。本当に来てくれたんですね！ありがとう。」

「いえ、こちらこそ。」

信也はメンバーにドウユを紹介する。彼女の来ているワンピースの刺繍は緑と青で彩られた柄だった。それはアールデコ、あるいはトルコらしい西洋と東洋の折衷したような不思議な美しい模様だった。「わたし、ききました、はじめて。シンフォニックロック。」

隣のジーンズ姿の留学生のような女性が言っていた。店員に二人に席を用意してもらうと、笹田が窮屈そうな顔をしていた。

六人とその諸々の人々で、酒と談話に興じて盛り上がる午後八時。

他のバンドがジャズ&ソウルなど、新たに人々の耳と目を潤わし始める。

「わたし、しゃべることができない、まだ、にほんご、です。Listening only, I can...」

ドウユの連れてきた女性は、生粋の国外の方という感じで、イザベラという。信也は身振り手振りで想いを伝えていた。先日、ドウユと農学部の前庭園で会って色々話したこと、トルコに行ってみたことなど沢山話した。彼女はそれを真剣に聞いて、尚且つ何か伝えたいことが沢山あるみたいで、時々眉間に皺を寄せて苦しそうな顔をしている。

「信也、ドウユさんって結構ええ女やないか！？よう誘ったな。」ドウユがお手洗いに立っている間、笹田が鼻息を荒くして耳元で囁いていた。

「おまえな、イザベラさんに聞かれるよ。」

イザベラが二人の方を見て、難しそうな顔をしていた。ドウユは留学してきてから、語学学校でアルバイトをしながら、大学に通っているのだという。先日の尚子とは同じ学科で、よく大学生活のお世話になっているそうだった。日本で学を積んでから国に帰ってからは、畜産の研究所あるいは会社で活躍したいのだという。信也はそれを聞いてとても感心していた。彼は彼女に比べれば、とても地味な夢しか抱いていなかったからだ。数理哲学を扱うような人間が、現実と関わる仕事などあまり無いかもしれない。アクチュアリーになれとか、為替の取引を扱う人間になれとか、そういうことにはあまり関心がなく、純粹に数理哲学に魅了されているだけだったからである。

「ドウユさん。カッコいい夢を持っているんだね。それに比べて僕は...」

夜は十時になるうとしていた。『ロータス』の客は半減し、疎らになり始めていた。笹田がイザベラと脇で親密になっていたが、信也はドウユに親愛なる恋情を抱き始めていた。

「信也さん、トルコ来ることあったら、ぜひ連絡してくださいね。」
彼女の眼差しは凜として美しかった。信也も笹田が述べた様に、いい女は国境を超えるのだと深く思った。

後日、信也は彼女にメールで軽い口調で恋文を送った。すると、彼女から返事はいつまでも返って来なかったもので、どうも振られた様である。純粋な男と純粋な女というものは、まるで理想と現実二つそのものの様に思えて、両者の間には一本の深い河が流れているのだと知ったのは、その後少ししてからのことだった。恋には不純な駆け引きが大事なのだと、トルコからやってきたドウユを通して悟った信也は、翌年三月、ドウユと共に大学を卒業した次第であった。

陽太

あれから、どれほどの時が流れたのだろうか。

俺と理枝は、再びこの地で幾ばかりかの時を共にした。周りの客諸々が、今を彩るここの者の様に思えた。

「喋れる内が華かしらね。」

手元の食事の済んだ白い皿に写る食卓の照明。その光を俺は俯きながら覗くと、再び白粉を塗った彼女の艶のある黒い眼を見つめた。

「…欲するものが無くなることほど、不幸なことはない。」

すると目の前の愛しきはずの彼女が、急に醜悪な程に憎たらしい顔をして、俺の顔面に手元のお冷を落涙の如く振りかけた。

「私を、私を、…そうやってあなたは裏切ったのよ！そうやって、あなたは私の前から去って行ったのよ！」

「…理枝。すまなかつたな。」

今度は財布から五千円札を抜き取り、彼女は目前に捨てるようにして置いた。札に写った樋口一葉の顔が、その時一瞬憤怒の形相に見えた。俺は下腹部から吐き気のようなものが上がってくるのを覚えてから、彼女に深々と頭を下げる。それが益々の不届きを覚えさせた様で、彼女は手持ちの白帆で出来たトートバッグを振り回す様に肩に掛けてから店を出て行った。

俺はその後、煙草を幾本か吹かし、店の窓の外に広がる裏庭、虚空の闇夜を見つめていた。そして立ちあがると、彼女が捨てたその札を店員に渡す。しかし、釣銭を受け取る手は何故かただただ震えていた。俺はもう何か、何か、それは既に人間ではない何かになってしまったのではないかという慄きを覚えて、均衡を欠いて事故をしない様、予約を取っていたホテルへ冷徹な理性で車を走らせる。備え付けのカーステレオからは、Princeの『If I was Your Girlfriend』の悲響が木霊し、二本のワイパーが規則正しく雨滴を拭っている。国道を走る車は、昼間の乱戦

からは想い及ばぬほどの疎らな流線を描き、赤と黄、赤と黄、赤と黄と、信号機が点滅を重ねていた。理枝の叫喚、しかしそれは理枝の心だけではなく、その淵源では俺の心そのものだったのではないかと今なら思える。

歓楽街の裏にあるホテルに着いてから、受付の男性が出迎えたのだが、訝しげに俺の顔あるいはその背後に広がる、その何か、人外の何かを見つめてから、チェックインを執り行った様に思えた。

通路を苦渋の心持ちで歩く俺は、205号と書かれた木製の古びれたドアを開ける。そこにはベージュのカバーの掛けてある、セミダブルのベッドがあった。目の前の鏡台と、粗末な装飾の施されたルームライト。そして、十六インチのテレビが俺を見つめている。

ベッドの上に荷物を置いてから鏡台の椅子に坐っていると、その何か、その何か、俺を背後の虚空から見えざる手を伸ばし、首根っこ辺りを擦った。すると、獯猛な何か、腹の底から溢れ出して、肩を揺らす様に幾度となく過呼吸を催し、俺は余震に見舞われている部屋を歩くかのようにして、化粧鏡のある備え付けの洗面器に向かった。

下腹部から得体の知れぬ轟が何度も何度も押し寄せては、目の前の洗面器の中に三、四の嘔吐を流した。化粧鏡に映るその人間、その人の皮を纏った、血みどろの幼子がそこに確かに映っている。

流水で顔を洗った後、口の中も何度か濯いだが、胃液の混じった香味野菜の様な食材の味は消えること無く、俺は狂ったように手持ちの紙に鏡台の引き出しの中にあつたペンで、己の贖罪を殴り書きし続けた。そして、声にならぬ声で呟く。

「理枝……。理枝……。理枝……。」

血眼の童子が紫紺に染まる。眠れぬ夜は、明けの明星を待つまでには余りにも長すぎた。悠久の時を過ごすまで、人はこの地を彷徨い続けなければならぬのだろうか。

いつの間にか、目が覚めていた。俺は人として、人と共に生きたいと、娑婆へと細い足を運ばせた。

山田

そこには教育熱の激しい日本に特有の風景があった。私塾の業界では、教育と経営という水と油のように相容れない二つの釣り合いの中で、講師陣と経営陣による百戦錬磨の営みがある。

ある私塾に就職した山田俊輔は、理系の正職員であると同時に、現代文から古典も任される二十三歳の若手である。仕事は盗んで覚えるものだという事は、これまでのアルバイトの経験、例えばホームセンターにて子供の玩具として扱われる破格で販売されゆく幼気な小亀の飼育や洗浄、農業従事者への真夏のトラックへの牛糞の荷積み、または接待と友愛に忙しいサラリーマン達が杯を交わす居酒屋のホールや調理人の罵声の飛び交うその裏方、あるいは委託契約という形態を採った訪問販売というマルチ商法まがいのセールスなど、それらの中で彼は散々と承知していたが、案の定その現場では仕事を覚える暇などやはり無く、その戦場の中で失敗を繰り返しながら身に染みる様にして覚えていかなばならなかった。経営陣による結果主義の策の生む使い捨て労働のような身分に準ずる講師陣は、寝る間も惜しんで知識の吸収は第一のこと、自身の経験や他講師の授業の見学によつて新たな技能を取得し、一心不乱に務めることを求められた。

人を扱う仕事柄、精神的負荷の重圧が生じると、労いの余裕すら感じられない職場における息抜きを要する講師達の疲労の種子となつて、皮肉を通した精神的暴力、あるいはその陰陽の裏を返した被虐へと結実してゆく有様だった。それは聖職者の皮を被った経営陣によるノルマや体裁を重視する体質に、そのような講師陣にも慫慂尾籠な私怨が満ちてしまつていたからである。

文系の主任職員を担う、橋元勲はそこで鍛え抜かれて生き残る数少ない勇士の一人であった。橋元は今朝もランニングをして、積みもった怨みを運動によつて昇華し、颯爽とした面持ちで職場に

現れた。

「おはようございます。」

塾という一企業は昼から始業することが多く、昼にも関わらず朝の挨拶をしてから仕事が始まるのである。他の職員が非感情的な挨拶を交わし合い、塾らしい伶俐な、理性的な空気の中で一日が始まるのであった。

「山田先生、Sクラスの大崎先生の物理の授業、明日の三時半から104号室でお願いします。大崎先生、ちょっと体調が優れないところで」

「。。。はい、了解しました」

総務の花池令子が明日の授業で使われる冊子を渡しに山田の元に持って来た。山田は彼女の急な申し出に一瞬断ろうかと思っただが、何せ仕事である。出来る限りの努力をしても些細な失敗をすれば仕方が無いし、それもこれからの糧になると考えて、当たり前前に了解した。しかし、そこには令子がこの職場では数少ない柔和な慈悲の持ち主だったということもあった。温かい笑顔でその様に頼みごとをされると、男性である山田にとっては断りの利かない温情のようなものを覚えて承諾するしかなかったのである。彼女は職場の縁の下の力持ちであり、社内の人間関係を正確に把握する心の柔軟さと強さがあり、山田には職場の華のように見えていた。だが、休憩時に肩の力を抜いて会話をする際には、ドロドロとした女特有の愚痴が混じることに、一部の男性社員は目の敵にしていた所もあった。

山田は学生時代にも令子に似たような女性、クラスメイトから浮ついたような感じがあった華のある女性が居たことをふと思い出す。そして、右手は製図用のシルバーのシャープペンシルで、冊子の中をざっと目を通し不明だと思われる部分に×印をつけて、今夜の酒の肴にしようと思心に決めた。

「おい、採点間違っているじゃないか。」

経営陣筆頭の翁、重田正太郎が山田を背から叱った。彼が振り向くと眼鏡に手を掛けて山田を凝視している。

「ああ、本当だ。すみません。もう一度やり直しますね」

山田は無感情にそれを受け取り、黙々と採点をやり直した。手元には六時十分から始まる、古典の授業のノートがまだ未完成のままだった。再び採点を終えてから重田に渡すと、納得した様に受け取り、しばらく目を通し始めた。

「また間違っているじゃないか、いい加減にしろ！」

再び重田が背から山田にその様に罵声を浴びせた。隣で近江が山田を只、見ていた。その時、山田には心の中に備え付けられていた防波堤、即ち祭事に使うための日矛鏡のようなものが割れたように感じた。脳天を透명한冷気のようなものが突き上げてキーンというような静寂さを覚えた山田が振り向くと、憤怒というよりも憎悪に近い、赤黒い狸の様な形相をした重田が彼を今にも殺してきそうな顔で睨んでいた。

「……。ああ、計算機使って計算したから、間違えたんですかね」

山田は無意識にそのように言っていた。この春、私立中学受験に挑みゆく戦場の子供たちが書いた血肉の答案を再び彼から受け取り、手計算で全ての採点をして、三回も見直しをしてから、間違いの無いことを“確かに”確かめてから、怒って居なくなつた彼の机の上に丁寧に置く。

そのような日々を送る山田の本日の授業は散々だった。言葉が出てこないというか言葉に詰まるというか、削がれた心の肉片の残骸が、知識の貯蔵庫であるアイデアの源泉が湧きあがる管を塞いでいるかのような、凍って生きたまま死んでいるドライフラワーのような彼の実存的なる佇まいは細々とした“翁”の声で古典の授業を終えた。そのせいか、山田の授業を聴講している生徒たちも、必然的に山田の佇まいに合わせなければならぬと察したのだろうか、静寂な張りつめた空気の中で六十分となつてしまったのである。

自分の気持ち、それは感情などと向き合っている暇のない終業後の馴れの果てに、ぐったりとして生気を奪われたかのような山田は、帰り際いつものコンビニに寄って缶コーヒーを一本買う。缶コーヒ

―を飲みながら、目の前の路上で寛ぐ縞々模様の子猫を眺めながら、「おまえさんは、いつもそこでそうやってるね。」と心の中で尋ねた。これは自分への戒めではないのかと、山田はその言葉を自分自身に対して反芻しながら、帰路へ着いた。

ある日、新しく就任していた代表を交えた人事の会議があり、職員編成に大規模な変化が起こる予兆の微薫を漂わしていた。講師陣筆頭の大先輩、六十位の文系の近江恒吉が積年の“功績”を称えられながら、退職に追い込まれそうな様相を呈している。その代役に配置されゆく運命の者、それは誰であったかは定かではない。山田は文科の華であったその厳しい彼をいつも内心で慕っていた。しかし、その功績が独りよがりなものであると周りの理解の浅い政治家から疎まれ、現場で彼を心から支える者は女の華道である令子を除いて、誰一人として居なかった。孤独の走者は、最後に栄光の帯を切ってゴールするかと思いきや、経営陣の策略にまんまと嵌り、使い捨ての華札のようにして終えることになるとは山田もその時は思わなかったのである。

山田はそれを訝しげにみていた。内部の空気がこの半月で急変してゆくように思えたが、社内の細々とした枝葉末節の出来事でそれはかき消されているかのように忙しく泡立って消えてゆく。

丁度その頃、若手代表とその妻が、社内では何か揉めていた。古株の橋元がそれを察知してたのだろうか、何か陽気な囁きでそれを皮肉っていると、若手代表が墨色の仏頂面のまま橋元にこう言った。

「…橋元先生、死んだらいんじゃないですか？」

社内はその時、微動だにしない蔵の中の空気のように凍てついた。山田は、大崎健太という文科系の講師と事務をしていたのだが、大崎は口を開けて啞然とし、山田はただそれを茫然と眺めていた。

その日から橋元はあまり喋らなくなった。沈黙しているというより、沈降している雰囲気山田の心の中には見て取れた。

物の怪が跋扈するこの渦中で、中立的な立場に居た山田は一刻も早く仕事の中心人物になり偽政を拭わねばならなかったが、元来の真

面目な性質ゆえか、地味な若手とあつて若手同僚の肥溜めみたいになつてゆく。戦場ではなんらかの生贄が必要なのである。それは戦士のための慰安婦の必要性に対する欺瞞のように、それは善人が悲泣するための葬儀の欺瞞のように、供物を食い散らかした後に天に捧げることによつて、己の安全欲求を満たすための精神安定剤に他ならない。それは古今から行われている原始宗教の血生臭い儀式の名残に違ひないのだった。

その後日、山田が深夜まで残つてある教室の清掃をしていると、その橋元が教室の壁の向こうにある便所で唸り声を上げて呻いていたのを聴いてしまった。積み積つた怨念の塊が、橋元の喉から密教の祭事に使われる御詠歌、あるいは御真言のように絞り溢れ出る様子が、山田の目前に蛍光色の幻影のように現れては立ち消え、現れては立ち消えを繰り返したように想えた。また、近江が辞職を迫られている近況は、あの令子の柔で遅しい子宮のような心を深く悲哀が突き上げたようで、ここまで近江と共に築き上げてきた社内の歴史、思想、人間ドラマを終結させなければならぬとなつては、丹念に扶育された丸い真珠のような暗涙が零れおちてゆく姿を山田はその夜、一瞥せずには居られなかった。

山田はこの日の夜、眠ることができなかった。明け方に聞こえた鳥の鳴声は、祇園精舎の鐘の聲に聞こえたのは決して気のせいではない。そして、近江と令子は仕事の閑散期を狙つて有給休暇を取り、幾ばかりかの旅行に出た次第であつた。

溝淵

幼少の頃、ある花の花弁が、一枚、二枚、また一枚……と、儂く散つてゆくのを見た。その花は、僕の住んでいる市営住宅の一階にある、コンクリート製の大きな花壇に、背高く生えた逞しい向日葵だった。

夏になると、緑が繁茂する公園の内で、クマゼミが生命の躍動を連呼する。茂雄という男の子と、あさみというその妹、そして僕はその鳴声が響く雑木の中、虫取り網を持って駆け巡った。

今宵は涼しき夏の終わり、茂雄の妹のあさみと僕はその向日葵がぼろぼろと枯れ行く様を、夕空を背後に重ね重ね、何か物悲しい風情を覚えて、その落ちた花弁を集めて手のひらに乗せては、二人で花壇の土に手厚く葬ったことを昨日のことのように思いだす。

「ようくん。ひまわり、たねがたくさんつまっているね！」

あさみは僕を見ながら微笑んでいた。あばたの笑窪が、歡喜の愛しさを僕の心に沁み渡らせる。午後七時、西日は既に沈んでいた。

あれから、二十年が経ち、僕は社会人になった。地元の小さな古書店で、歴史書や文芸書、思想書などを扱う新米の店員で、店を訪れる老人や文学青年のような気難しい客を相手にする、地味な店員だった。それは、ある女性との長い恋愛の末に、現実の愛と理想の愛の落差を味わい続けた後、己の人生に懐疑を抱いて隠遁し、この個人の書店に勤めることにしたのであった。

その女性、いや、その“女”は僕に力を、あるいは行為を、あるいは言葉を激しく激しく求めた。その女は情緒不安定な顔の化粧の濃い女だった。

彼女の名は静子という。僕は初めて静子にあつたときに、その儂げで今にも崩れてしまいそうな美醜の裏、深い悲哀を抱えている様に、何とかしてあげなければならぬと私事ながら思い、彼女をどうすれば喜ばせることが出来るのかということに一心でならなかつ

た。彼女が泣いていれば、その小さく発狂する被虐的な情緒の混沌に、毎晩付き合わなくてはならなかった。彼女はマスカラを何度も濡らし、一人の時は髪を自分で振り千切るようにして無意識に抜く癖があった。彼女は男性の愛情に飢えていたのだが、その愛を受け取る能力に乏しく、終いには暴力すら望む有様だった。そして、その非道たる暴力の中に、己の存在を見出す様な所があったように思える。

僕が彼女を好きになったのは、今思えばそれは愛情だったのではなく、同情だったのではないかと……。僕を罵倒した後に、濃い化粧をして街へ繰り出す姿には、耐えられない屈辱のようなものを覚えた。何をしても、何をしてあげても、決して満足することの無い、その貪欲な“女”の姿は、僕を女性不信へと陥らせる格好のスパイスとなったのである。

恋愛に理想など今更抱けるはずはなく、鬱積した裏切りの不満の中で、いつしか僕は先人の遺してくれた活字、それは古書の中に、その理想の愛の原型イデアを求めていた。黴臭い店のレジの裏の一畳ほどのスペースに、古びた机を知人から譲り受けては設置した。そこは僕だけの小さな小さな書斎、唯一の理想の居場所だった。右手には黒い万年筆を持ち、古書を通して学んだことを大学ノートに筆を走らせる毎日が続いた。

ある日、一人の男性客がやってきた。真ん丸とした、熊のような風貌の男性だった。紺色の和服を着て、雪駄を履いていた。彼はじっくりと店内のある一角の本棚を吟味している。幾分かの後は何冊かの本を手に取り、レジに持ってこられた。

「これ、お願いします」

彼の顔を見つめると、僕とは目を会わずに俯いて、何故か少しだけ微笑んでいた。目当ての本を見つけて悦に浸っているのだろうか。

「ええ、これは……、湯川秀樹博士の手記ですね。中々、乙なものを見つけられましたね。あとは、個人出版のもの」と

「……………」
間を置いてから彼がこう言った。

「本には魂が詰まっています。古書を通して、いまや現存しない方々と触れ合うことができるのが心地よくて」

僕は目の前の男性が、急にそんなことを言いだすので、驚いて口を開けたまま聞いていた。

「あなた、文学部かそこの人？」

「工学部です。でも、本が好きなんです」

男は妙に艶めかしい口調で、微笑みながら僕にそのように告げる。その佇まいと彼の言葉に僕は心を打たれ、次の様に申し出た。

「……………」
「ちよっとお茶でもどうですか？　僕は溝淵といいます。いま、用意しますから」

彼は断ることなかったため、僕は店の裏に回って、即席のお茶を用意した。彼との会話に興じるために。

それから、彼と出会って一年が経っていた。僕たちは、プライベートで夜中まで始終会話をする仲になっていた。その中で、気付いたことは彼が同性愛者だったということである。

彼と二人でカフェに居る時、僕はいつものように浮んだ思索を大学ノートに書き連ねていたら、彼が不意に僕のノートを覗きこむ仕事をしながら、手の甲に接吻を重ねようとしてきたことがあった。最初は驚いて、単なる気のせいだと思ったのだが、後に彼は自身が同性愛者だということを冬にあつた芸術祭の会場で漏らしたのである。

僕はその時一瞬戸惑ったが、彼の人柄が良かったので特別気にすることは無かった。しかし、彼は僕にいつしか身体を求めるようになっていた。僕はそこで僕自身が男性で異性愛者なのだという信念と、彼の僕に対する親愛の狭間で心が揺れ動き、身体は受け付けないうが心は受け付けられる……………」という矛盾した葛藤の中に居た。今思えば、恐らくそのような矛盾が生じた背景には、かつての静子との狂気の恋愛が深く身に染みていたからではないだろうかと察してい

る。

目の前の彼のたわわな裸体を見つめながら、僕の性愛の対象ではないという本能的拒否感と、しかしながら僕の親愛の対象であるという矛盾した受容感の狭間で、再び僕は鬱積と葛藤と同時に人間的なる歡喜を覚えていた。パイプ椅子に裸体の僕は腰を掛け、肉体的交接を否定しながらも、精神的交接の喜びに満ちていたことを僅かに思い出し認める。彼の下宿先の古びた床板の上で、彼は僕に何を求め、そして僕は彼に何を求めていたのか。それは、今思えば陰陽の調和だったのではないかと思えるのである。

「いいかげんにしろっ！」

しかし僕はある日、その本域に遂に差し迫る直前に、彼の肉体を、いや彼の心を、手のひらで突っぱねてしまった。すると間もなく落涙がぼろぼろと、彼の大和撫子のようなふつくらとした顔面を伝った。丁度その時だ。僕はその時初めて、“彼は女性なのだ”と深く悟ったのである。その涙は、かつての狂奔する静子が見せる涙とは比べられないほど、美しい、それはそれは美しい女性の涙だった。僕はその時、極めて難しい気持ちを抱いたまま、枯れ行く向日葵の様な彼に頭を垂れ、謝ったのである。

「ごめんよ、ごめんよ、僕は……、やっぱり駄目だ」

心底情けない男だと僕は自身に思った。同時に本能的に彼を否定する気持ちに辟易とする。そして、僕たちは一線を越えようとしてしまったがために、そこには深い溝のようなものが後に出来てしまった事実を忘れない。

今でも、あの夏の日、あさみと見ていた向日葵を思い出す。

あの向日葵は、花卉を何枚も何枚も落として美しさを失っても、遅しく最後まで生き抜いた。美しさの花弁は何度も何度も、幼気な子供たちに雀り取られて埋葬される日々を送るかもしれない。しかし、本当の美しさというものは、あの向日葵の様な生き様にあるのではないか。

もう一度、あの、あさみの言葉を思い出す。

「ようくん。ひまわり、たねがたくさんつまっているね！」

これを思い起こせば、今ならその幼気なあばたの笑窪のあさみを
いじわるして、ぼろぼろと優しく泣かしてやりたいとさえ思えるが、
その言葉はきつと真実に違いないのである。

東城

雨戸を閉めて、机上のメモ書きを一気にパソコンへ打ち込んだ。ある公立中学の数学教師の東城好夫はまた考えていた。考えても考えても到達できない、ある問題を。

男と女が現実で出会う時と、男と女が夢の中で出会う時というのは、全く別のベクトルなのではないかと。夢の中で出会う男女というのは異性の理想像というものだ。ただ夢を見るだけの状態だ。しかし、現実で男女が出会う時というのは、あからさまに容赦なく、戦場の中で戦術や呪術のようなもの、それは「駆け引き」と言われるが、そういう狐と狸の化かし合いの様なものが実際は必要である(らしい)。

例えば、二人の男女が現実で出会うためには、男が行動的になつて積極的に現実に進んでゆく中で、女と出会うなければ出会いはない。何らかの用事を作って、動いてゆかなければ出会うことはない。仕事で結果を出し、稼いだお金で飯を食わすような最低限の器量が無ければ見過ごされることも多い。幾ら机の前で、本やパソコンとにらめっこしながら、ひきこもりオタクのように生活していても、女との出会いはないのだ。例えそれが夢を叶えるためや、自分を高め高めるための何らかの勉強であったとしても、壁に掛けてある時計が、一秒、もう一秒と時を刻むように、それだけを永遠に続けていたら、結局は女とは出会えることはないのである。これは物理的な意味ということだ。

一方で、女も行動的になつて積極的に現実に進んでゆく中で、男と出会うなければ出会いはない。男と出会うためには、マナーのある程度に着飾り、自らを動かしてゆかねば目立たず見過ごされてしまうことが現実には多い。見過ごすような男が多いというのは疲れた男が多いからだ。また、男は女と違って外見から入る傾向がある。外見の印象が良ければ出会いの一段階目はクリアされ、お互い

によく分らない初対面の選別で省かれた女に男との出会いはあまりない。自分はブスなんだとか、醜いんだとか、そのような後ろ向きな諦観を常々覚えていれば、結局男とは出会えることはないのである。それは精神的な意味でということだ。

しかし現実の恋愛市場は、利害関係なのではないか。そこに小綺麗で洒落た理想的な演出をするのは単なる飾りであり、本音は利得を貪るための仮面を被った社交界ではないか。そこに愛などというもの、レプリカでしか存在しない。永劫回帰というか諸行無常というか、人と人の営み、それは男と女の営みなどというものは、娑婆というカオスの中で、本来何の秩序もなく、湧きあがってくる情動に左右されて行われては、また鎮静し、また行われては、また鎮静しを繰り返しているに違いない。それは、バーゲンセール店内で、周りの客が飛びつくブランド物のアウトレットに、何の疑問も無く手当たりしだいに買い込むような、周りの客と奪いあって、ワーワーと華を、熱気をざわつかせるような、その後、ふと我に返った時に、自分は何故あんなものを買い込んでいたのだろう騒いでいたのだろうと思うようなものではないか。現に結婚などというものは、その華や熱気というものはいつのまにか消え失せ、気が付けば二人の男女はおのおのの人生の墓標に向かつて、それは目的に向かつて、歩きだす。勿論、歩きもしないものも多いのだが。

同じ墓標、同じ目的がそこに初めから無かったとすれば、堅実な男女でさえ赤の他人のようにして暮らすのだから、一時の欲情で結ばれた二人は冷めきるどころか、荒廃した戦場の家庭の中は、不倫やら喧嘩やらなんやらで離婚に至るのは当然ではなかるうか。そこに残るのは生存のための利害関係だけなのであって、その利害関係を見ないようになんやらで離婚に至るのは当然ではなかるうか。そこにいるだけである。その妄想の中で、どれだけの子供が犠牲になっているのだろうか。冷めきった妄想の恋愛関係の中では、もはや人間関係というものは、情愛によるものではなく利害によるものへと変質しているのである。この男女は共犯関係であり、この二者関係

以外で出会う者を例え、小奇麗で洒落た演出にて迎えようとも、利得を齎すための存在としか見なししていない。愛の不感症のように思え、また、愛を買おうとする態度が見受けられる。

であれば、再び返り咲くのは、そのような恋愛市場の中からは逸脱していたと思われている、狐と狸の化かし合いの出来ない男女ではなかるうか。純愛が韓国ドラマにはあると言われるような、確かな人と人のコミュニケーション、それは霊と霊のコミュニケーションではなかるうか。うやむやにせずに、真つすぐとお互いを見つめ聞き合うような、そういう恋愛ではなかるうか。

労働問題、教育問題、そういうものを考える前提には、それら以前の恋愛問題という、情欲の揺れる力才な領域への洞察が必要ではないかと、好夫は常々思っているのである。これを現場主義、いや現場思想だと好夫は痛いほど身に染みて感じているのである。

健也

Donald Fagenの『The Great Pagoda of Funn』をi podで聴きながら、健也は街をゆく。国道の界限では騒々しい夏の宴、蝉の鳴き声と共に、耳元で響く風波の音。歩道には幼い子連れの母親と茶色の滲んだシャツの老人が歩いていて、交差点を二段階右折することなくターンして、トリップ。目の前には、鳥居が見えた。香取神宮の大鳥居が、バイクに乗った彼を獰猛に惹きつけて、加速する二乗の運動エネルギーは増大する。

駐車場には寂れた便所があった。健也は用を足すと、右ポケットから皺しわになったハンケチを手にとっては、こめかみに真つすぐ垂れた汗も拭う。すると目の前に、二三の花壇が映った。毛むくじやらの、蔦のような蔓が伸びては、昏顔がもこもここと真ん円と微笑むように咲いている。近くに寄ってから、手持ちのNikonを取りだしては、斜め四十五度の角度から彫刻刀で彫り込むように狙って、雌しべを中心に添えて彼は丁寧に写した。

参拝者が絶えぬ神宮の称号ある香取の神域には、幽寂とした清涼な空気が湿った地面の上を平行に流れていた。時々その流れは隆起して、小さな渦を巻いては、とぼとぼと歩く敏感な若い女性には、何ともいえぬ恍惚を覚えさせ、不思議な靈妙が感じられるという。それは、陽気な男どもには感じられぬものようだった。

健也は社殿に着くと、二礼二拝をしてから、がらんとがらんと鈴を鳴らした。その内、小さな駒犬が、はっは、はっはと息をむせながら、飼い主にじゃれつくような感じみたいに彼の傍をうろつろつしている気配がしたが、足元を見ると何も居ない。賽銭を投げてから、気にせず祈念をした。

ざわめく木々の葉、家族連れの談話の声、社殿の中の協和した音色、それら全てがどこかへ遠ざかって、深く深く、彼は己の心の声

を聴きながら念ずる。何を願うのか。何を求めるのか。周りの者には何も分らない。それは秘密、秘密の宇宙に真つすぐと繋がり、溶け込み、時々霧散してゆくような、一抹の本心。健也が神域に足を運ぶのは、それしか理由は要らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7454q/>

Short Short

2011年10月28日03時16分発行